水絶て[illegible]柳朽ぬ[illegible]老木はそ
[illegible]菖蒲の[illegible]
書苦精を[illegible]
年ふりたり[illegible]世[illegible]の名
木やらん[illegible]語り給へ[illegible]昔の
人の[illegible]直し[illegible]鳥羽院の[illegible]面白[illegible]藤
兵衛教清出家し西行と[illegible]
[illegible]人洲崎[illegible]水[illegible]
月半ばの[illegible]洲崎の[illegible]
[illegible]立[illegible]一首を詠し給
しより謂[illegible]八面白や扨[illegible]西行
[illegible]人の詠[illegible]八行[illegible]言[illegible]やらん
六[illegible]不[illegible]勅の[illegible]門[illegible]も
[illegible]集[illegible]八[illegible]髪[illegible]

道の[illegible]水[illegible]柳[illegible]
[illegible]て[illegible]菖蒲の[illegible]
[illegible]の世[illegible]も[illegible]老木[illegible]
[illegible]て老[illegible]人の[illegible]十念を
[illegible]前[illegible]
[illegible]の古[illegible]
[illegible]や扨朽ぬ[illegible]柳の
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]洲崎[illegible]露[illegible]
[illegible]紙海[illegible]柳[illegible]
[illegible]星[illegible]朽ぬ[illegible]柳
[illegible]

直[illegible]道[illegible]
必得[illegible]功[illegible]
[illegible]暑[illegible]老木[illegible]
白髪の老人[illegible]
[illegible]柳[illegible]
[illegible]古塚の草深き朽ぬ柳の
[illegible]老人の
[illegible]
不審[illegible]給[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]一念十[illegible]
[illegible]
[illegible]洲崎の[illegible]
[illegible]一人念仏西方便[illegible]一蓮
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かみの名所濃き姿ゆゑ[illegible]
道果も柳の陰なるべしや　其外
玄宗華清宮の宮前の楊柳寺
若乃花として誠め絶まぬ名木なり
[illegible]の名所陽やぎ清水[illegible]
色よみそ[illegible]龍良と寺[illegible]水上
[illegible]人色のなりそ[illegible]打[illegible]柳忽ち
楊柳観音とあらわれ今も絶まぬ
松とめ[illegible]打[illegible]
[illegible]地蔵八幡[illegible]花園大宮
人の[illegible]の面影李
乃[illegible]
青柳[illegible]
諸人の[illegible]陸奥

[illegible]の白[illegible]
[illegible]
[illegible]

げに事もつきぬべしとあらん者ハ落出て
よし人〔世ノ人〕者の波の郷〔ハ〕て者〔ハ〕れ明暮よ
昔の去人〔ハ〕ぐ〔ハ〕まつ〔ハ〕〔ハ〕〔ハ〕みしまやお
見ぬる世の新話〔ハ〕を〔ハ〕事とみくに
めくしあくハ行すみくあるう
海のかつをすを出入れりとを話を
はるめ世とはまよ行が根と本うわ
も周号入めくれ小車のやたきれ
人の罪科ハ首都ハそらいしるう
れまおくも鶴り実科もたりも
浪の高さ山ハ情ぶ
よつきてひとおを代ハ前よ寄
ているう行と拝まと高よ流て
根とハ更よ四ひを 拝ぶよ我まを

波よ流めを拝ハん〔ハ〕あく責た
り行とく 拝ぶれも人ハ考と
ぶ中よ具ぶ根と別りて流を
も第ひ人ハ世よ世話たるぶ文も
ぶひ慰めて引給ぶがハ根もそる
きよ いハをとて本悪ハ山ぶ
ひぶさ世の人ハ拝ひ草もたけ
ぶめと行と高の蔵 住居ハ浜世
ハ俵の富ぶるとく親よとて行や
鶴ぶ高ぶ生れきぶるき慈ひ
つ鶴ぶとひくぶるとぶつく苦
しぶの海ぶ流ぶひと責て生ハを
絶人や跡とぶるをたまハや 言語
者ぶ拝ぶる高俵ぶるとぶハ今ハ

行とるとひくき昔ぶの方様語りて
ぶきるハしぶよるく家人拝も去
年三月廿五日の夜入て浦ぶ男を
入ちるき海ぶ馬ぶく渡とくき
所やるとぶ者ハやるぶん
行願ハ様ぶる前ハん月ぶるよ業
よぶるぶハまよハ西よぶるとぶ
八幡大菩薩ハ山者と思ひ家のよ
わるるもるく隠ハ者と呼二
人拝よまれ悪ひ海れぶさを
公直く海ぶ感謝ぶるもやハ
やくて薦ハ筋ぶき者ぶくぶやん
よ語んと思ひ便よハ落ハかも
ぶるく引よを二刀ぶ甚く海よ

沉めく時ぶるる拝ハぶるみてあり
きるるおしく行ぶも考世ぶる
と思ひとハ根ぶ行ぶ 拝ぶ拝ぶ
を言ぶ行ぶ性ハ人ぶるわいつ
を れ様ぶて行ぶ ぶきよみくるう
ぶハの岩人ぶるわの浦ぶるを絶
敵をるくぶるぶ 拝ぶ人ぶる
しをぶるもたるぶりきぶるつほ
ぶるとく波ぶ ぶる人ぶ事ぶく
ぶるぶよ人ぶ考ぶるぶるとよ
拝ぶく隠ぶきぶるぶ法を 考ぶく法を
思ぶるも ぶぬぶ人ぶを出ぶく 密事ぶる
軍をひきぶを長れぶ親ぶる賞
ぶれまぶきぶハるも行ぶの酬ぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きの国の桂の木陰に立ちゐるを
隠つたかとたづね人ありとたよ
ちう露のおのつゝとしつゝとむ
れ井に立ちゐるを見つゝ桂の木陰に
人みてうり見いはるゝ人やしん
者姿を顕まそあるを聞めけり
なりゝおつてもゝちゝ浦ぶる所人
えてまうひう恋ひつゝやとう
なりみしきるも新ゝ長く
行つは乳やかつもみよやひやう
ありいひ人あるひてまつ浦をを
ろ変ありませ　人行をうつ人
きゝ新に天孫地下四代ぼりてうみき
とゝ新ゝうせ　恋ひう新やあれひう

みのを風てゝ人そとまのあゝりんちゝ
ゝみゝきあゝ　はやゝきゝ法ぬめよ
ひて強ゝそう隠きあゝけて見
近ひてんかゝいゝも行うてぬやん
ゝ人ゝ不審ゝ理ゝ釣ゝ魚を
れ嵐て見ゝ近ゝ寿ひ来ゝ宴ゝ行
くゝや浪ゝ妻ゝかゝうゝ行ゝくし
ゝ恋ゝきぬゝ理ゝ龍宮ゝうゝ言
かゝゝ宴ゝ楽ゝかゝ行ゝ三人のゝ
豊玉姫　新やまゝゝ人ゝよゝひゝ
たゝひよまんゝ名ゝ楽ゝてゝう
あゝゝ行ゝ新ゝ楽やひやゝ行ゝよゝや行
ときてゆゝてのゝかゝうゝあひく
ゝあゝゝひゝてゝあゝまゝのゝ

めゝよゝとゝうゝつを成ゝるなれ
法やゝてゝうゝいゝうゝあゝせゝうゝ紙
釣ゝと言ぬゝし山心見ゝ思ゝれ人ゝ
ゝゝゝやゝてゝはゝひゝ言ゝ言ゝ
ゝゝゝきゝゝも天ゝのゝたゝうゝれゝ言ゝ孫ゝ
つゝの都ゝ言ゝうゝ言ゝのゝあゝうゝ
きゝゝば見ゝれ　紙きゝたゝうゝきゝひゝめゝ
きゝゝうゝのゝほゝうゝだゝうゝのゝやゝてゝうゝかゝや
きゝ雲ゝれゝやゝへゝうゝゝゝきゝゝるゝとゝきゝう
ゝ人ゝうゝう　かゝうゝいゝうゝうゝうゝいゝうゝさ
ゝうゝつゝ絵ゝ言ゝの言ゝ葉ゝと語ゝく給ゝ
ゝ新ゝのゝうゝんゝの釣ゝ針ゝとゝがゝうゝめゝう
浪ゝうゝく魚ゝよゝうゝくゝあゝさ由ゝと歌ゝさ
浪ゝと具針ゝ琴ゝんゝとゝうゝゝゝや

かゝくゝよゝせゝうゝとゝいゝめゝけゝまゝくゝのゝたゝを
ゝさゝこゝのゝうゝけゝうゝんゝし語ゝうゝ行ゝくゝうゝれ
かゝこゝのゝ心ゝ海ゝく思ゝ言ゝまゝてゝうゝさゝて言
言ゝつゝ風ゝよゝうゝんゝしゝゝゝ言ゝ言ゝ言

やもめくらしをよりてかよひつゝあるを
ぞ乞食のあるいかとて行端もきくみ
えたるうや　秋きぬとめ見りやう
よりて秋の音信いつれを　きゝぬ
ひつるれさを　ぞ　やきゝ宿も
あり　哀三界ハ宿あり　一生のこ
ぞとうりてきゝきんよいつとこ
きゝへき　めやよこの方へ　やの門へ
とう　そもあの者う　あるれ
人のゆく法やおてある　流され人よ
てもゞ学をハあるとゝ作う　平
家の侍悪七兵衛景清ハ
哀れ　哀れ人を八義ゆくゝ人ハ
育用あれハみる事ハ　ゆもあ

きけるを様ゝ　きゝりくゝあれを
ぞ乞食のあるいかとて行端もきくみ
寿ねくへ　扨ハ此あるうきくハ
きよゞ見より奥へ出るて寿ゝ
いへ　みやあ人の者をめ成
あるとねーていへ此盲目ある者の
みゝくいきゝ我一年尾張国あつい
みく接ゝ初一人のみとまうく
世よあれハ行の事ハ方へきうと男
鍋釜かめうえやつの長ゝ顔を直
かあれぬ親ゝとかゝ父ゝ向つて言
葉をうひ　老をやゝて面かけを
ぬ盲目うかあきゝおのうてうゝ心私
あるく親ゝまつあれくゝ　いりに此

あるうよりゝと人の流りゝ　平家
行の門あてゝ　あるゝ人の行
名ハ法ハ　流りゝ人ゝ　平家の
悪七兵衛景清と寿ゝ　平家
此方へ出ゝ山陸ゝ　ハ
いきゝ　ゝ　ハ
ある人食ゝ　盲目
ゝ景清ゝ
ゝ景清ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ

ゝ一度ゝ　ゝ対面ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
言語道断　扨ハ景清の内息ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　

あるべき世の人の心なれば、海へ入り、
山へ入りて、義清のわたらんに、悪七兵衛景
清のわたらんに、いかばかりかはまさるべき
たよりなき故郷の者どもに、事をかたらひ
ていはく、そもそもこの世を、いかばかり
さぞ行末の悲しさ、涙をながす、万
事みな夢のうちの夢なりとて、
うちはめくどの世を、いきあとを思ひ
切るに、食を悪七兵衛景清あり、
とくよりこの世をこそ、思ひ捨てしか、
秋の夜の月の日向と、
ひたすらに、
名の悪心をこそ、思へども、

いやいやこの世をのがれ、
ひたすら、前の景清を、
たづねんとて、いやいや、
ようの事、たづねんとて、
いやいや、
傷をかけ、やぶれたる、
あとをかけ、
つたへ、
まくは、
制面に、
まして、
露雷と、
も、
慈悲も、
親
の、
義清は、
月の、
母よりて、
墓の、
揖の、
ようやまれたる、
騏驎も、

ぬ。是ハ雲馬よとられ、ありこやくなる
わる痛りやをかう度ア〜へゲカよ景
清よ申ル。浄娘この近前ちの作
仁事ア〜てひう　八潟みく景清の
此高名のやうゆ申られ。さ由仁わ
ぞとは和語うてきかとしりまてんへ
是ハ和ア〜ア水流仁似合ぬ所望ア〜
ア〜ア〜これ迄ちく多りたる心ち
しぬよひ。ア〜ア〜ア〜ア〜ア〜ア〜
ア〜ア〜

杜若

是は諸国一見の僧にて候我此国へ都より西へ下り筑紫の方へ行旧跡訪ひ
なく一見仕て候又見より東国
行脚と存候　ゆかしく候ひ
ぬ　扨此所は何と申所にて候ぞ　此所は三河国八橋と申て杜若の名所
にて候　扨杜若の名所にて候ぞ　いかにも此所は名所にて候　ほくもとりの
名所にて候　扨ての花の有りと思ひ候へ　いかにも此所は名所にて候
扨ての花の有りと思ひ候へ　いかにも此所は

[illegible]の立節の舞の[illegible]
形見の冠唐衣身よりはなさじ
冠のきめはそこ直ぬ[illegible]
成[illegible]
植[illegible]
女[illegible]
葉子の極楽の歌舞の菩薩の化現
[illegible]
法[illegible]
露の恵の仏果の縁[illegible]
[illegible]
[illegible]

花の蝶まねがくたるゆき柳
ようは蔓とふけたる人生年　植貞

菅の宿のかさうと計うう　色りの社菅
かきつばくと計うう　色りの社菅
名をとめく花たらもれの名ひつる
あやめのつるの　色色いつき似たるや
似うれ社あ花あやめこすあるまくハ

蝉の唐衣　玄圭　神白ぬのうの花の
雪の花手ちくくあくまつ
めてあさむ　ちさの社君の花も
花の仁用きくどやう社なす
岡ともやい風そ草丈岡お書皆
仏佛の　　

二人静

是ハ御ゆり野勝まれ御をんよつ
えゆ者ゆくハ扇も面社ようさき
御非ゆ様これ庭の中ゆ月
百ハゆ三ゆうゆ葉とつませ
非前ゆ伽へゆ今ゆ相ゆうて
ハ狂ゆ女ゆ付ゆつゆ川へつゆ
ハちゆやとゆ作ゆうく女ゆ
夏ゆ川へ出ゆとゆハへ　乙渡ゆハ
松ゆ様ゆ白きゆうの山ゆくゆつゆう
し雪ゆう　三ゆハ松ゆ雪た
ゆ青ゆくゆ新ゆ野へゆうゆ橋ゆ
ゆ伽へゆやゆうゆくゆやゆ社ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

加つるあり[illegible]れてもみやこのつたの[illegible]文陸の花の雪ぬもたまるぬ
奥山のとさいうしき春の夜の
月も花ほのぼのとてれあり[illegible]ひさのやま
[illegible]ひく有さ風の唐衣
[illegible]ひらく花のようと捨て[illegible]ま弱月の
[illegible]きとうのうへよ[illegible]ゆき
花[illegible]ふて[illegible]ぬ[illegible]惜しサ年の
[illegible]ぬ[illegible]枝もぬつのもりてしけりかつき
みやこの山風よちる花[illegible]
[illegible]
奥深く[illegible]山路部[illegible]
[illegible]頼朋よ石出[illegible]
[illegible]

[illegible]もときぬ[illegible]の神[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]れ衣を藤懸の[illegible]露きさ
油やをほ[illegible]
東を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

うきく と霄の沖宿みることを
[illegible]
[illegible]
[illegible]

をとりてだき火をしてうくやはらうもとるまくん猶ほ侍へ志
る給ふ人びとハ物やさうしのあるよ
ていやうく市婦人へ はらハ頂て
歸へしやいなんぬ人の命ハ迄
此国のうち市後しいを心ハ
ものやうたへるまくいが公日暮く
思ひ入へ あら蛙やいがまくく
ハ殺しくんお此寺入宮僧も病
いを心ハ すやあくれ
国入ハとおう陸ようくみきハ膿血
怨融泥し臭穢ハ鬱てほくちやく
し膚臓悉爛壊きりべの死骸へ
ぬしいがきくつを直うり

ゆ杖異き音よゆゑ立扉乃窟
塚よでもきく冤乃ぢをかまり
地
ゆうろやはるうきめとみちのく
乃安達原の黒塚よ冤こもれりし
詠きんぐ乃心もかゝや説し
上おそ
うろもまくひ所ときゆくゆく
へき方ハきねゆ先よ住きくよきを
てかくく
ほとけ
めゆよあき成宮
僧とまれと社ばりしかきを国
めうちとおう庵よまれまるきを
恨よ者りたりぬとうひほの
上
ゆ感陽宮の燒ゆくうり
地
ゆ風吹落く
地
あるかを稲妻夫地
地
よみうて
地
ゆきをきを雨のよの

冤一口よくうとて 地 歩ようれ色
音 地 ゆうりゆれ錫杖いきほひ
地 ゆうりと拂くうりや 東方
よ浮三世明王 南方よ軍吒利夜叉
明王 西方よ大威德明王 小方
よ金剛夜叉明王 中央よ大日大
日不動明王 唵呼嚕呼嚕旋帝利
摩登枳唵阿毘羅吽欠娑婆訶
きりかそ吽于結 見我ゆ者發業
桜ゆ関我ゆ者ゆ惡魔義聽我
説者得大智惠智我ゆ者即身成
佛即身成佛と明王入きくく
きて責りを世めい世ゆりゆきよ
うりちくきりよ

地
ゆ中
ゆりとあつる冤
地
ゆ
地
ゆまりよりよまりて
地
ゆ
地
ゆ
地
ゆ

賀茂

清き水と寄ねてやりく賀茂
紫宮居よ手覧　柳見ハ播
州室乃明神より住ハ神祇の者
ゆり拝を都乃賀茂と當社室
乃的神ハ神一神なるに何久ハ
求事侍申ハまの祈よ洗度思乃立
都乃賀茂へと急いるうりの面かる
室のとほう乃求明ゆ〜たつ
桜衣をうしろ〜ゆかち行舟
もゆほれ雲井やくかるの月乃
影の山陰乃ぞの宮居よ名ゆ
くりく　けれ手洗やばきさ心よ
もゆ水のゆ行ゆ乃ゆ

よ見ハ水汲ゆ世よ寄ハ人へきるゆ
見き洗ゆうゆて見別ハきゆ
ハ事ゆ行くうゆハ事ゆて
作う　まうくハ後ハ
見ハ播州室乃明神の神祇乃
去ゆて人ゆて南社よ寄ゆて
ぞと是ハ行きとゆ行ゆ
壇とつき百ゆ綿よ白羽乃矢とたく
剣へ宮仁乃きゆきんとうりでゆう
も行とゆたくうゆくゆう　拝ゆ
室乃明神よりれと事ゆて
やゆ見ゆる矢ハ當社乃ハ神神
ともゆ神ゆともハ洗ハ矢のゆう
ゆりゆくきゆなゆとゆなて世

渇行ゆ世ゆ見ん〜　宮乃邸
きゆうゆ拝ゆ南社の神拝ゆ
ゆて様ゆうゆき世ゆうよゆて
洗矢ハ謂妻く語ゆ人し
ゆて神乃ゆうゆゆく数ゆ
ゆゆゆく一年を歌ゆし昔
洗矢ゆの実ゆ祭ハ氏女ゆいく人
ゆゆゆ行過ゆゆく水をゆ
神ゆゆ内ゆゆ流ゆ射ゆゆ白
羽乃矢ゆゆ流ゆ洗ゆ桶ゆ
室ゆ面ゆゆ彩て海ゆ竜乃行ゆ
ゆゆ行ゆゆ懐胎し男ゆ
洗ゆ三歳ゆし時ゆゆて
父ゆゆ人ゆ洗矢ゆ行て向ゆ

ば矢即刻れ雷と成るぞよあるう
神と成る雷れ神先也　其母
尼こもかみやもありて賀茂こと
ろの神ぞとや　ちやうよりをれ
ちやうの御入神秋愚あるうよ
ちまへ　きいうよたいさちと風ちやた
きの人乃治め所代とつき白羽乃
八百萬代のまを迄もぢ筆よ弱と
ぢあり　鈴くまけいる鈴や掛く
其矢八のほるよりとまの世よあるう
如矢迄も御神神鈴ある謂ちあるよ
実うく不審ちたへ先滿八あるう竹
うもし　ぢかうくもむも濁るも
同し流まの様とよ　かしけ頼も

かるる乃　下へ白門　上八賀茂
下　又　其ちうも　かうる名乃
石門やきんの小ちのきよきれる
ぢく　月もまるれと寿ぬてぢとむ
も弱ちも同しにはぢうぬ心て
御　擬ひ乃うへき年の矢乃早く
きちうえ薩打　てもゆんぬき
きちの水流きいうもつき絶きぬそ
御成きるいさくぬとゆきうく
嘉　くるやゆしいちきよきかものうは
せの水といるの水有ちうん　行く
とか岩根松ねたのこうぐ滝津流
きちうもれ音ちうぬやきゆはか
ぬちまうくみうち大井行ぶれ紅蓮

ぬ雨ちうう　門のうこと新鶏ちう
ぬもちうや　ちうる発　清流ひて
水くまば高根ち深雪ときぬちうき
明日まちかて消つよ　くまの音
羽流浪は　りきてうう乃雷とう
と　嘆く桶も　乃とと　ちうも
きれおひうとぬぐうも同し行さ
きの日を等の視うとうう最
うちうう濁るちうう水とちの神
乃ちきまつよ神乃御心くまつよ
実有難きはうれが様よ毒語と
神ぢとれ八ちう成人やう　ちとは
八うは愚也ぢちうや神ちよとも
むき尚へ風う君を守ちの此神

徳と告ちうしめんと影を出く
ちうう神ぢ　ちうの真をちうはさ
は様やおあさ風ちうが乃ちうん
計いちうぬゆちうのやうちうとう
うしぬうてよ立まきれて神
かうれよりきりや神ちうれよりう
よちう　ちうう弦乃れりうかやお
我此ちやうの地とちうて法界無縁
乃家をたちよ子と杜ほうう
ちうひとちや乃神徳ちうへしやお
ぐちうぬ代と守ちうう　まうれ
へしちうへしやお君のめくちも入う
此付　時いうまちうとき神たう
感應あるまは尚徹れて相ぬ荘厳

まつあるうらのおくのやま　かぎの
山なみとりて陰ゆくうらの
ろをとりて神をぬひとしてと
とくく齋をとりほひかりよ
山行まず動揺してまのあたりある
わをいうるうの神あり来現し給う
神を見ぞ切とまもる天皇の道
あ雷の神あり月月上巳あひの諸天善
神とるとく懺悔をよ乾行し　北条
国土を安泰の方便　和光同塵
結縁に染あり首をれ神事やお
風雨随時のたうの雲井少く　上巳
あ雷の雲きりとうとう　ひうつ
稲妻いあくの露まも　やる程

たよなるいうられ　夜　雨神をうして
ゆうるる貴人　ほろく　ほろ
ほろぐろくとみとろろひぐる
うの敵の時も来れ五穀成就
を国を上りうまる時は洲
神徳と感応を引しまりまして
御祖の神へ乱の森に花ちく
いを見へ打立ちや雲きりと
ぶりうの神をあ国ちよろ
ろ神も天海よりのほうく
度重よあくを立ひきる

俊寛

昔は相国に仕へし者なれば
此度中宮御産の御祈の為
に非常の大赦行はるべきよし国
に流人赦免あるべきの宣旨下る
乃流人の内俊寛僧都成経平判
官康頼三人赦免の使を遣
はす同じく流罪の島へ
なれば顧みもせざりしに
九州に帰り流罪の流人の内
俊寛の少将成経　平判官入道
康頼二人の果てくいせ
ず時経野と云ふ三十三度乃

ぬけをおりて立ちてくれを半
ばもたてかくて流人の
あれい有ものもなくやはあ責て
れるの絵のよや此島に三経野を
初清ト都うの道中の九十九
慶の宮を　道々順礼の神路
ぬさを捧げつ宮を通しても同じ宮
居と三経野のく浦に流し
と人物麻衣の法ほうをたてその
まれ白衣の法衣を着て散米
よ三ぐ山のみくきして神よ
歩とぐるまりく　なの世を
まして冤罪の島寄く　あるうれ
果て晴きうり　くるき道みくへよ

[illegible] 玉宛晝眠雲母の地へ[illegible]
[illegible] 不顧の[illegible]
て鳴盡て頭をめぐらしたる俊寛
[illegible] 俊寛
寛[illegible]
[illegible]
[illegible] 行の為[illegible]
[illegible] 行[illegible]
[illegible] 酒を持て来
[illegible] 行[illegible]
[illegible] 見へ水也
[illegible] 酒とて
[illegible] 醪酒
[illegible] 見へ
長月 [illegible] 宣陽 [illegible] 山路 [illegible]
水乃 [illegible] 数[illegible]

[illegible] 深谷の水 [illegible]
夢と菊水乃[illegible] 心の底も[illegible]
[illegible] 山[illegible] 菊[illegible]
[illegible]
[illegible] 心[illegible]
[illegible] 裏[illegible]
[illegible] 草木の色そ
[illegible] 青や黄[illegible]
[illegible]
[illegible] 見城の[illegible]
[illegible] 減色の[illegible]
[illegible] 盃[illegible] 酒ハ谷水
[illegible] 物[illegible]
[illegible] 毎の心[illegible]

やいとゝいひ[illegible]
[illegible] 流
[illegible] 教[illegible]
[illegible] 鶏[illegible]
やゝ頻に康頼[illegible] 仔[illegible] 中宮[illegible] 産
の御祈[illegible] 大赦行
[illegible] 非常の大赦行
[illegible] 流
[illegible] 教[illegible]
少将成経[illegible] 入道康頼二人教
[illegible] 仔[illegible] 俊寛[illegible] 讃
[illegible] 仔[illegible] 教[illegible]
[illegible] 拙者の[illegible]
[illegible] いや[illegible] 康頼成
経二人ハ[illegible] 俊寛一人[illegible] 成経
[illegible]

罪も[illegible] 配所も同じ配所
常も同じ大赦[illegible] 獨り[illegible]
[illegible] 三人一所[illegible]
[illegible] 流鳥[illegible] 離
て海[illegible]
[illegible]
[illegible] 数[illegible]
[illegible] 有様[illegible]
[illegible] 感[illegible]
[illegible] 鳥も心[illegible]
[illegible] 鳥[illegible]
[illegible] 冥[illegible]
[illegible] 冥[illegible]
[illegible] 感[illegible]

あるものゝ光源の名歟もあるべし我と
ものや況んや[illegible]
きゝ侍たる巻物をよしなきに同し
法師のみ[illegible]
経康頼と云て其名計あり[illegible]
を開紙よやうなるものゝ巻物にして[illegible]
れ僧都も後寛なかりせは文字は
更なりて夢の面も夢あるへからす
よくとうあさ後寛を有様をみ
る社れなりきれ[illegible]
まし初経康二人つやさみよ[illegible]
とよ　かゝてあるへき事あるはは
よそのなきをきとの様で二人は母よ
つ[illegible]

康頼は法よりつきは　僧都は
母よりあるまとしたきあるきあるに云
[illegible]
うたくやあるほやもの
わるうと云のあきはせめくは
向はれ地を成た情よ[illegible]
情もあるあ母ともは檜[illegible]
[illegible]
[illegible]

まうさせたまへ　主よりも面よりてはべれば
塀やの門見苦しかるべきなれば　いやいや見苦しき
者かな　いと出家めきて久しくなりぬ
一夜宿りをかりばやと　童ばらへ
いやかましきまし　暫くばかり夜
歌よ見てまつまし　無とて接人よりく
かりあり　海の家　松風　水桂　竹　塀
門　さいそと思へ　君　火　あるて
まうあまとたへ　此方へ入る
言うれやかりかりまし　ひとまし
ぬらと　お宿まを　ひつまたばり
月　苦しかるべき　拾　石
ある　弘法　出家　棒　ひばり　へき

分あるねいつくを宿と定めん　其上
此浦海浦よ心あるん人　ばかりも住
て弘法へまれどうよ同じ　海人
浦　ほ　ほたるつまとこ
行平も詠給ひしとありし
歌へ一本の松の名人よ寄て久
松風　村雨二人　海人　旧跡
狂　縁　ひて　弘通　ひつま
笠　松風　村雨　とて久
二人　其　魅　の　行
て　や　男　あれ　芦
あ　顕　き　海　や　ら　同
人　入　拾　ば　ま　う　ひて
執心　海　行平　中納言

きまし　海　尚執心　海人　海人
此世よ　海人　世　わ　海
子　海　海　海　海　海　海
海人　海　海　海　海　海　海
海　海　海　海　海　海　海
海　海　海　海　海　海　海
海

[illegible]

[illegible]

[illegible]

成心なく　高野の寺にて見侍りし法の結縁たりとおもふ心ばへ侍りし

おもひ出をとどめてかへる花の色に　なほ面影の残るなりけり

日本一の侍きやうやうやうやうの中にて

ゆかしさよりて都より洛東の花を見

ゆかしさよりて先達の貴き所をたづね

あらんために先達の貴き所をたづね

やがて　洛陽の花

感ずるもとづくもとづくもとづくもとづく西行の庵室

花もいとあはれなり　月下花陰晴れ渡りやすらふ

ゆくすゑ三伏の夏もなく消滅の

松の風一聲の秋をもよほすなり

乃ち　ひとりきたりて　いとまを

いとかなしくなんぬるよきに機縁よりて

ふかくなりぬるとて　花見に

ゆくとて　桜花

咲よりまさる中の山ひとり

ゆくまに此木のもとにたちよりて

秋の又心をかけて花の本にて花落

塔と親つつ　ながめ心をとどめ

貴賤群集のいろいろ　花もちり

ちらで　花の中の山とい去　ちりぬる花

都あれば　捨人去花よりと隠

家のかくれ　ながきちりぬるあれば去

よりてかくれ山ぞとうさ世のちりぬる

ある人　花をうらやむ捨てたる世のほとり

あさ物といつつ井のもとみるかな

めでたき尊き先達　ちりぬ心

ちりぬべきもやさきの社人去おも

うに　捨てたる世　花をうら

あることのもとにて　花のもとに

ともずとて　心の外あれも花をとも

もきつ人のうれしかりつつ　桜の

やうにあらんとて　桜のいを

とわて　月にあるよのあれ本よ家

高きてきろともよこうひ花のちる

仰して　あとたよ詠めうちん　堤

人　きあ　仰と高めたる心の花

ありきろうや　花をとものきつ人の

[illegible]

自髪の老人ありて西行の手を
[illegible]もるる桜ばなもつきなる伝説也
是を夢中の翁ありて今の詠手
[illegible]
[illegible]
人間しづれよりそもそも今の
詠手のこと[illegible]
[illegible]
不審のあるべきもあれども[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

なかるべし玄宵一刻價千金花よ
情春月よりけ春の夜の　花の
うをうり明るあて　はなもまる
ぬあきてうあ　はうれ　ぬあ　く
まて　きてしく　あきまて　いてさう
ちて　ぬ　はの陰　ありまうがうはまる
とうの　陰よ　ぬうよりうの　はれ
まうの　ぬ　ぬはりよきりう　ぬ
さめよりあ　も　雪も散　くや
花と　く　はりく　情　ぬ年
の　の　の　月よきりや　菊ちして
絵もおしく

浮船

はるは　はは諸國一見れ僧ゐく　はれ　我
此頃は　初瀬　ひ　見　より　都ふ
の　ほ　やと　雪　ゐ　初　山ゆ
ほし　暮　富　もや　く　だ　原の
うそよ　輪の　ぶ　れ　杉　立　別
果　ま　よ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

の山の妻戸の語人　柳沢の語
と申しに具足もぬがずてゐたる心
横きれいろひくいもんとの柳
うち面の数のもあるぬるのゐしう
よそやと見とへきまつ沢まよ古き人を
あまり宮仕をしたるひあるるる
沢深みのうほ中将のかりうめよ
ひとれあるりくせ人かりもあるく
心さ面ようて行ほうよりを
をあいひりあるさ世の人ばのか
ぬるをもうさ心のさ長都で宮
るん悪ひく寺たせるみりあるさ
のつ面あるき貴の人めも悪そがい
まつてをもしもひん所

わのまれや具よよ梅も山信のめつう
所うる核恋よ去て有明の月や
書る猛なるよ水の面も雲りあく
船りとめしひるて灯の氷ふ
あく道を迷のたうもあるう
ぬ桜うあるてかの長間すてや
あ行るる思るりく晴め謝うみ
もぬ面や増るまんぬよるく
りひ沢世よなるもあるくやと歌
きし来ちあて経よあと去所
よきりく　浮船の入はすい妻ぬ
ぬりれいるくよ信人り　月見寝
有よりよ面ひものもれ也ひる
梅ふ所の者教のつるまい絵

笠のつるや行るや絵ことたりひる
横よい梅小船をて八誰とか寄り人き
かるれあるる大ひえの枝れるる八ふ
きれれ横りの水しもう方をしし
さるく寄ぬるし　猫あのをるる
そして鶴しるあるるなりるる力を
頼るるひつあまるく待やりんと
うさたの雲絵るく行方るひ所
よりりく　かるて小野よ来れ
つを宿と宮むき　所のるりへれ
のるれかく草の桜ハ理やどうひ
家よ経るうる波所跡をどうとやく
なる梅
まるる影を絵めもるり滝りうる人宮
めぬほ舟のぼの力と軒まりある面

山や本ようれハ浮舟のるる町のわ
てたるうる面ようる君をれんと思る
るひ沢世よなるもあるるやと明堂
思るるるるくくるあねたるるよ書
るるるれるる出るきれるるう行
良あるるきるえるよるる寄のるる
きるいるおひゆと思るるう心も
宮よ所るるる　あるるきれれる事
るなく　我るのきるるる面や
芝はまるやあるるるやあるるるるる
陸小島の老ハかるるるを　沢るるう
ぬるるるるるる人るるるる大慈大悲のるるう
るるくよよひるきれるるよるるるる
るるるるるるるるるるるるるる目の

[illegible]

呉服

[illegible]

[illegible]

[illegible]あやとり二人の人あるうじに現
在より彩き給ふ侍とりしたるまか流
[illegible]やくも心ひ給よおりおそこの里を
呉羽乃ちくぐ付うめ[illegible]も[illegible]故う
我洲のよ有し山へ[illegible]
やはうとしなくおの乃ぶをとりひく
たくこゆあやれ紋をもあひ故よあや
なとうとなあり　呉服とうとなる
おの乃ぶくまをいられをといへ呉羽
らてようとつぐれをとりとい
[illegible]
くれをとり　あやとはは[illegible]
綾きはれらは唐人あれわやまと詞い
ちれれ　くれをとりあやよ[illegible]く

[illegible]
[illegible]日て二月はじよみ寺もぶい
[illegible]と思ふ心なり　呉羽[illegible]あやし
[illegible]
[illegible]
[illegible]

陰より探若さてでも肅くるるの時
秋の苦くも物くるるく
代きあるの羽衣まりはよておつた
りさあ山常ほるるなんぶ世ゐやちよを
松の葉のぢうるをひして色はるま
りされるるおりきよのだりよひく
や綾の紋ぐるるりまる時とや
浜荒のぐあき世とる夕浪よ色た
くそるぐるの音　錦を繻るあ
りるるよりるの字をあるる寝
つ雅のるよ恋るの拝松のひど
きいるる浪のま　おまりよひ風
あるるるものとるや昊羽の手く
るるいと　秋とるはあやも

のあをと　きるるるるるちやう
きるるるるちやるくと　恋魔
もるるるく色あるまやきよるるひ
りのりるるるて　見るるる
繻芸くだまくるるる系松人の
夢の精霊妙童堂薩も影向お
見るるるるるるるるるるるる
のあやを繻るるく　秋君よりるき
るみよのるるるの二人の繻姫
昊羽あやのるるくよるれもあや
るやるくのるるるるあるるる
代るるめてたまれ

月を南に海原やるくはの浦の浦
秋景色　月は昇りて八都方より出る
備るくは秋は四国を三ひは行る
洲度男の立西国行脚と心ひは
るる玄震るる立良のれるる海く
ひ日の雲も影るひて昇方の空
と行るるるるるる月海へて八鳴
に浦よ名るるるるる意は行よ見はや
讃岐の国八鳴の浦よるて皆の
景て久八見成塩屋よ立寄一夜を
明さるやと思る　面白や月海
よるるるひくく波濤夜火よ似る
漁翁る西月よて宮とるるさ

相水とるく数行とたるるへよ
るるて音火の陰ぼのるるる
やとるるる　月の出塩のれるる波
震るるるるるる　あまの岬
色望ちの　一望萬望の海の
道は一帆の月よと　夕への空
空の浪月れ行海よ立潮て雲よる
るれ原の陰八緑るるるひて海月
るるるも出るるひ琉望の海るるく
るるる家る八鳴の浦るひ海の
家るも松るよる　釣の人る風もなる
るるく震れるるて中れるる風の
小るの人ぼるるくるるて見るる夕暮浦
風るも原風れまるるとる張るく

[illegible]屋より婦[illegible]やとまつひらまつ
塩屋の主[illegible]とてはこの邪宿をかり
[illegible]やと思ひ[illegible]やはり[illegible]
業門[illegible]
一見の僧[illegible]一夜の宿をかりつ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひつのちまくまん　音八受答乃
花たアるまゐ花ハ藥藥の
とゐ花をこそすゐとれとろへむ
えき凍寒のゐ花とつ杖つゐ
てハ力もなつくを根をかこちゐ
ひつくこ行やをゐなゐ花と人
きつゐ上ちりこそハ捨ゐ命の身よそ
ひくゐ面影よくもかんかくさ
ゐをかくらと音をてつれ書ねね
の夢ハ寝ゐれゐるさよをゐさを
くるゐ花心くゐ花ゐ見成
ハ小町をてゐるゐ見れ雲乃
上人をまゐひごゐちと彩り
いや行ゐるくゐ花て此程き

いつくを極と定めきるゐ　たきや
むくこゐおゐれくもゐ南寺過ゐ日
牧を送りゐ　ゐくゐ南寺ハざれゐに
都をかして困者ハ面白きゐ有ゐ
前ゐハ牛馬ゐ通路ゐて貴もゐさ
賜きもゐ　後ゐ古霊籠乃山
たゐくて　ゐかも通もゐく　ゐき
春ゐすゐ　立つくゐまきゐこゐやま
ゐ乃ゐく　梢ゐかゐ白やハ花ゐと
みて　ゐくこゐや花も白ハ花ゐ
ゐちくゐと討ゐ古雲ゐ音
面白きをこゐりゐゐ見れゐ潮の
志賀かくゐきれゐこゐ松ゐ乃ゐこゐ
ゐくゐを東ゐ向へゐる紙ゐ乃ゐまの

観世音をゐれゐ橋ハ和人ゐ
ゐさ命ゐかゐたゐくゐし
かくて和ゐ古くき付き業ゐ
ゐこくくき教をゐきれたゐ
なゐれ校ゐすゐ都路ゐ出くゐを
こゐをゐ時ハ涙ゐ南寺ゐ歸ゐ
ゐゐゐ小町ゐ人ゐ手を讀くゐ
ゐ和ゐ人百家仙洞ゐまくゐた
ゐ付くゐごゐたゐくて手をも
ゐみし吹ゐハ花ゐくき穂ゐ出て
霜れかゐる有様ゐく深世ゐ
ゐくゐくゐそゐ　実ゐ道理ゐ
帝ゐゐハ情ゐ伝手をゐきゐく作
ゐくゐハ　ゐと帝ゐゐハゐれ

ゐれゐ行ゐとゐりきくくゐやゐ
ゐ紙ゐハ者眼ゐ中文字ゐゐゐ
みくゐれゐごゐきゐくゐゐれく
ゐくゐき作ハ　ゐ中ゐゐたゐか
ゐくくゐき文　雲ゐ上き
ゐハ　雲ゐくゐ者ゐ昔ゐゐ
ゐゐゐ玉たきゐくゐゐ
ゐくゐ面白ゐハ手ゐゐかゐゐやゐ古き
ゐ流きをくゐて水ゐをゐれゐれ
ゐ手ゐくゐくゐゐれゐ
ゐれゐ時ゐ陽きゐゐ有絵ゐ手を
ゐ一字ゐくゐゐ　ゐきゐ
ゐ者ゐゐきゐ三十一字を
ゐねてたゐゐゐゐ手ゐ

一字の字とや事が是も拙氣の
故やらん いやうと云文字社を字
あれ 又云もとハ和いうに けり
帝の伍字を詠吟をもせ給へ
不審あるもあるまて雲入と云
ぞ とよかつねとかて五文字
からやかりき 小まくらうらや
南きをひさのきてうらそ南き
とよ付ハ小町うよたるを云
あり 拙いうへもかくるるの名
や 侯 あるもむくしと云ハ
此字の接とあり帝の伍字を
ぞひまくるせく讀付ハ天れ忍きも
いうあん和字のみうあハ非も

ひくたつまて貴かくて高
位よまくくて云ぞ和歌の
德とやく 又字の接を寿ぬ
あ長字短字旋頭歌形句俳諧
異体字あ也くに文字あり
あ今つく鶴鶴そくつく唐土よ
そくつ島あり異ぬとあ也くに
人の云くくをてとれるかの
物とひけるくに行くてよ
ぞ今の名くくよ字の名を云も
かくくなきへぞ今くとハ
あり文字や字の名さ海澄うつを
いくへ物思うくそれ忍きも
あかんかうつめ字くの其

多くくの中歌の小町ハ物あり花
にこうこうの名所ハくれうあそ
ようくくと續とうう家くに伝
みもくう 直くく 和字の六
義と寿しの文小町の字をとう
だくもと歌あるよひくの云かれ
あり義へのかくもせうもくき
よてうの花とつくくて桃花雨
れ柳緑ハたくやうあり紫筆
ちをうこきほこう梨花ハ名のん
ハりとべう進藤とれくふわて
ていい表つもく小町そ云なりく
ぞ今よ小町葉平玉津鳴おくは法樂の
詠とまもひくへ 拙も葉平玉津

詠よまりはてとすくくへ新もれ
あくまんと都とハまいとこめ
ていなりの山蔦紫の宮も浦ちかく
和字吹上よりくくり 小津鶴よ
まりつくく葉平の詠て独思り
めくくまりくくさきの特衣
よ歌紋のなる風のうそをやりかさ
ぞ云ありめちまつ 和えのひ
かりむつま めくくひ独やむを
くうかの浦よ志ふくくて
かいまに良の 名をとりて田
鶴あさわくくるくくる 名つうも
よりあやきのひねのたの名もよ
しちやきのひの月夜めて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちくまいてせんし　あら面白や
さてとは此木の名なるか　うて
やあ此葛城山の宮の中よりひい集め
うくあくの梢を揮ちたつめさりぬ
きゝたあきやうと社人　あら面白や
扨は此ぞとこしつ木は葛城山と面緒
あくまくはよまつ　申よや月
古きにたの言葉なるか　樣とはひたる
葛なるなれば葛城山と名よをたり
見やしまひつきとはいつ　宮と
みくさは大和詞のぞの者を思の
わかり宮も　あるあとゃ　ちとしは
葛城山よりは宮はいくまくまくはまく
思ふ　ふれと讀寺のとの樂をへて

大和詞は独の雲もかくは世の歌のよ
のこゝ　ちくまくも高間山の霧のも
重ね煙はかえるつくたりよはえ
うてかくはよりは葛城やは入まり
えくは稍素は山伏入りつ歌入と社人を
ぞや芋は電光朝露なれ火の光
のまくと思へは我はは歌きとも
百副くはるは樂をたりよ　はして
人の苔衣の色はくはよくは墨
染の袖もはくは白妙の雪も色
をくかんはたは鐘魚もはしまくは
ぞもとあつめはまくはくきくと
は芋くは葛城の山伏はあくはくは
為神の杖はをは休めをへはをは

やとは給へ　あくは蛭やは藤魚を
りていはくはやは石はあの勤とは
を思ふ　は勤とは有難や神よは
やはくはくはありはつはは入つはくは
はくは加持はて給へ　はくはは
勤やはくはくは行とはくは事
や後　はあきたはは女は五障の罪
はくはは法のとは呪詛をは此山
入はくはは行はは葛はくはをは
はは三熱のくはくはは此をは
くはきはたは給へ　はくはは
三熱の苦はくはは入きは
はくは古入は法は岩橋はきはくは
は是とはくはくはは明王はくはくはを

いまはめはくはくはくはくはくはは
はは　是はくはは入はくはは
昔の葛城の神は苦はくはは
石はは入は神はは　はは葛はは
はくはは岩はは　はは入はくは
葛入は　はは入はくは　露はは
霜は著はは起仰の岩屋はは
鍵戸のは　明はは入はくは
入は神は五裏入はくはくは
かはくはくはは岩橋はは法は
神はは入はくはは入はは
岩橋の苦入は衣の袖はくはは
選はくはは法味はくはは
神葛城入は神はは入は

一心敬礼　新葛城のもすかの和
えの歌よみうたれて立裏の眼と無上
正覚の月まちまし法性真如の寶の
山のぼる味よひろわく新うつりゆく
勧めだりませ　つくやおかくろる
山に常陸うの神の神とおほくて
玉の井くの風うつの前とかきうくて
葛葛のくひまとくくくかる足衣　光
のうの行へや明まのひつくかくくるをい
まりめて　すす三熱の神ちろ　年
つれ宮や　たちしつよ　葛城山の
岩橋のうくるおれと月宮のぐもいち
ちくき神神のがちくくきうほくせ
つ神海ちつくやすりや芳野の山

うつがきて通へや岩橋のだり風の風
見あれや神玉手りめて大和葉
いちやれてん　ふる雲のおもとゆ
きあせぎうよきく
岩盤戸れ葉ゆくぎ海の青くしも
向ひよみうちて川ちゆく雲ちうく
ひはまも自然のきさまれともぎよ
ちうくきの神の自ちちちうや
ちとゆやうりやまりやのさ風よ
ちゆのたくおきぬぎとかつうき
の羽無うせと葛城のようの盤戸
ちて入ないとのちよ入ぎよ

第　教へう和きまつかちくひちれ
道よりつよ　昼八会の行者ちて
我此度三熊野よまり下の道よ新
て仏ど昼ちう大和路よりう當摩
此寺よ来りやと思ひ出もおも
くゆり紀の路の南ちてくぎ三
熊野の岩田行宿もちるり月月影よ
ま畫わぬ心ちて雲もすりうまを
かりニよ山の麓ありぎく南の寺よ
岩よきりく　一会法華経即滅
無量羅去とれう　八萬諸戸教
皆元ちうたりきよ　釋迦八
やと　法花みちひく一筋よぎうゆる

もちの南無阿弥陀仏　唱つまに八佛も
我ひいりきり　南無の法花の老
もちり　海ちさ道の頼もやう賀りよ
まぬちの志賀りよちぬ千すの糸
ひ五々ちよりそうあん　有難や諸
佛のちひ様とおれ表わきく超世の
悲願とぼひの中ちもはよりいて
つもの八晴やあ雨天の月の歌ちよ
ぎちぬ浜ひぐちや西へと計頼ん
ぐや海めりちこ道とぐ寓ちとぎ
絵んかまの世ちまよ我ちか為ちれや
皆元ちうたりきよ　法花八昼ちう一老のぐぐ
やとき法花法花八昼ちう一老のぐぐ
ちとへと頼まひい妻人法萬年く
ちまよ海鹽の法花ちもあり　だまく

此寺は法隆寺に次ぐ古の世をまつのそれ
月まの出るく言葉しく法の場よりも
なりは法の場よりまれなり
是なる寺人きれば
けんいたる國の中寺やど當麻ちる
まく宮成世はいとしいをと
ぎて清めて具なる深殿の井
やとや　あまき當麻寺　是八當麻寺
まし此寺は深とく　ぞ栄えて
法の見伝やの法ありともぞしもも
自然の一節て一心不乱なるしあ伝
なる人のと幾即見てとみと
一教あれ拝又見成花橘常の寺

かりつ見も故ある寶樹とみしう
宮うく出発しなりたうあき弘
の色を深て　掛てほされ梅
花も心の故お蓮の色よ咲いつり
中くめしなるも赤国成伝
乃ぎ香よりめる花心芸　法の御ひ
経うて　深よまめもひ乃いや外
もくきて清めし人の心の　深ひを
ほとハ　ひちてこの　きつく掛し
蓮のと接ぐく花の錦乃そぬきま
雲の方面よ晴曇る宮も緑も紅を
一きの誠乃や西吹の風あるく
と當麻の曼陀羅の謂妻れ初法人
抑此當麻のまんだらとまんだ王四十七

代乃帝淳仁帝天皇御宇かとよ横
鞍乃右大臣豊成とやし人　其御
息女中將姫此山よりこもり給ひて
称讃浄土經毎日讀誦し給ひ心
中よ楽ひ給やうなりく八月十五日
夜中あらくまれ給ひまをと
一心不乱の観念し給ひ　さるひ八月
今と朝ごとに此寺法を聞と整つく
一向よ念佛三昧乃場よりなり
前ハ山陰の松吹風も涼くてなお
かつ夏を忘れ吹く音も俗ごとよ心耳
とすまひよももとく称名観念の
乃此深淵月の宮のうつ響と
乃ハ郡殿人の者ハ忽ち参ら

たるひのうの見ハいかうんやうんや
寺ねちを踏ひ　お者ハ参て宜つく
ぞとかるや愚なりしへハ社なりた
きとぞ　ちるまを中將姫ハ参れ
つ　此名を呼と鳥たつ
ぬ山中陰とうるとそ　ハ山ひたる
の唱へなて又使るも動きなて
ちを拾ひ　ひて　れる前　ま
出るへよ来ひり此宜ハ姫君も拝ハ此
頭陀袋　ひ　ひ　ひ　ひ
附帯よと感激乃ひ　ひ
衣の浄袖もまこもりよ見ん
ウ　や貴きお方乃ひみの故へと思
よつきて右縁や　さひも二月

中の五月まくぞらも時分の時節あり
ばくすをおりし為今浄土よ多り存
法華経の為に命をすてし人
浄土へ行てうまれさせ給へ
今夢中よ頭き
たるは中将ひめ精魂あり新盛
京時讃浄土経朝夕ひとすらに
信心成仏おなじ安楽の国界の
京都の名所の因縁よりそ
仏菩薩の大慈大悲の御
界の法華経の眼目雲路よりやき
法輪の音聲能賓利の再よみて
蕭然あるも暁の心
ひろく衆生のうへ
ひろく衆生のうへ

うきやあく世の音ぞ
業障のまれてうりぬ
きちよく

今夢中よ頭き
たるは中将ひめ精魂あり新盛
京時讃浄土経朝夕ひとすらに
信心成仏おなじ安楽の国界の
京都の名所の因縁よりそ
仏菩薩の大慈大悲の御
界の法華経の眼目雲路よりやき
法輪の音聲能賓利の再よみて
蕭然あるも暁の心
ひろく衆生のうへ
ひろく衆生のうへ

うゆ心の浄土経つきまつまやく
捨取不捨 為一切世間説此経信
也法華為邪経 宮も此法もかい
信ずるも頼めや
頼めや
慈悲加給へ
心ふし
十老も
一期の有りや
法華の鐘の音
秋の月の音
見仏聞法
事宮もあ
京都の西方
浄土
出れば
三笠山
海士
月の
都の西
天地のひろき
恵
久しく
天つ
彼の法
彼の
海士
月の
都の西
天地のひろき
恵
久しく
天つ
彼の法
彼の

あるこの浦よりまうでつかまつり候めぬ
海人をとめ〳〵 申候はゝ
さや讃州さこの浦よりはまうでつかまつ
よりまをされ男女共者ゆをさこ
さて一人まうしはべりを御ゆるして此
所の謂を委しく尋ねまうしたるに
海士共申しもよりを出よあるべし
我らあるひ我らあるは是を讃州さ
との浦寺ちまれたるあさ海
つ宝乃海人みくしぬやをろ打
伊勢をのあまいゆあまをぐらとの
山の月をまち濱荻の乃ゆ秋をまち
ぶくと海の海士人塩まうもあるは
桜をおもうて花をまちぬたり

きあるこの浦をてはあるこゝもゆんの
みあ海のあるをて花のちくさも
あり行をみるめかりみよりかてもし
ふき海川のあく堀海かまて流き
あり世をわるるさあれば心なす
ともいひかるさあ海乃ちくよく
らあるく 明月夏かはだとは浦
浦の海をてるか けんは浦らう
うさの海をくは かつは海まあは
乃水底のたるめと詠て弟をく
痛りや桜つれ何よのそまを花ま
かや我と夏宝やは狂いやしき
田舎れをてよりきや雲のうへ人を
みるめるれいかりは乃もあり浦らめと

石れ人 いやくさ桜の雪をてあり
乃此水底の月を御覧とれをみるめ
きをうて障るあれば乃月きよとの
御覧あり 拙者月れためうれ
きよとの御諚や首もけうため
あり明珠をとの知きをて龍宮
とれをとりさあきも此うれ
あ海の月もう塩のくみるめを
いけやかよ 宝伝と明珠をうさ
あきも此浦れ乃海をうとやう
けんは浦の海をてはまあまは
宝をあ海の宝と申てかの海士人
の伝をけ在所をてはは長なる
鳴はは珠をとりあを始てみてめ

ようつく新しきたま鳴と書て新
珠鳴とは 拙者のゆとは行と
やきをを 釋迦乃像ま
まはいつたよりあをたれは同一面
なるようて面てをはつようを
ひとかつく面向不背れ珠とは
かほとれ寶と行をて漢朝うも
わるきをう 乃大臣法海元
は妹をあるう高宗皇帝乃后よ
たく勅給はまはきを氏寺おき
をとく興福寺へ三乃たうをとは
はれは花厚磬四濱石面向不背の
玉ニ乃たうへ京をし明珠へてれ
仲をて龍宮へとられをを大臣はをを

やつし洲浦よりすぐれ賤しき海士
しなどとうきりとをめぐりの御ふとと
まつ〻の風の房陰の大臣是おもと
屋の是ちうふくきの大臣よりあり
あつ〻の風人やすくかうと人
あら行たおやぶ迄ちうめすと私
思つるよ拙はすのよまていひいろ
うやあつ〻使おやぶ大臣つ〻大臣
けけ子ちはまめくこひくまし藤門
ぶけ心よかくうすう洲うのうく母
とうし あつ〻時傍臣かうていく
ぶれくもれ母ハ濱州芝この浦房陰
のあまりやとハ猶き有てことハ
とうこひりていやしき海士の子

上青 ぶ門のめのそうやうきそや
ようこうしてもつきこうぶ
宵も月れ光雨露の恩よあうし
やとぶハ寿ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
あ海人やと声あうを流ハ者ハ
貴心あ古風哀ぶてもぬし
我神ぶ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
乃ぶうやぶ貴人のいやき海士
の脇ハ宵ハ宵ハ宵ハ一世あうしぶと
を白月の際ようつて光陰を
まいてくあうぶあうも光あ海
ぶ浦こうハ乃ぶやもとうう
や我君乃ぶりよ仇たり裳の袖浜
門の口と図ていそや水鳥れ声立

ぶ乃をいくこひまう 中門 迄乃うよ
仇むをうつきあをう有をは前そ
そうまあつてはめよ歌人 ぶ乃うハ
そと風あつてはめこいかきへし其海
あ風人やうぶ洲むをうひうう
ぶけをを作つきの所位よあう絵
やきしうハ細あうと領字し
ぶ乃ぶ拙ぶ我ようまとて人命乃風
雅も借ハうと千寿乃縄をとう
ようきぶ洲むをうえたうハ洲
むをとうこうひうし其ときハ
ちうをうぶうきぶと人を
ぶうあうきんと約束し
ぶうあうきんと接をて仇海士よ
むひれハ宵ひうよ雲浪燈の浪

をそのきつぶかいまあうくとわきいう
て直下とそれ度ハ御過うも去
ふ海士よそそ神蒙をいさう
と最をんうハ君宝あう 宝 て龍
宝よりうて富士とそれうの高
さ三十丈乃五塔ぶのうまをとめ
をき書花とう あ人寺護神きハ
龍弁ぶうう其外悪魚鯨れぶのう
きかうや新命ぶちとう悪蒙の古
御のかうう恋しきぶうハ乃あう
あうあうあうあうあうあうあうあう
ぶうあうあうあうあうあうあうあう
ぶうあうあうあうあうあうあうあう
果あんをけうと濃くみうたうを
思うきうてまとあをを南無や

志渡寺の観音菩薩の力をあらせ
たまひ給へとて、大悲の利剣を頸よ
りて龍宮の中よりひいれ給へ
ばつゝのいとまもなく甚陸よ。寶
珠をぬすんでなきとすれども奇
讓神とゝく急くたくみし事お
れば持ゝつゝきをれもとゝ乳の
もとをかききりむと押て剣を抜て
うつたるとき龍宮のあひよ死
人をいめ、あるよりとゝく悪龍
あり約束の縄をうてきを人と牧方
にあきりゝ出ひ海士人い
海よりひいてゝうかくてう
ひいだきとも。悪龍のよりとみて

て立ぶもつゝひあきよありたゝ
もつゝよありめ〻もむ〻く
かきゝとゝ屋あけさ給ふ。ぶ
息ひとゝりやう。我乳あゝと
はゝをとあゝ。ゝも剣のあゝたゝ
ゝ行ゝ。ぶあゝ光明くやく
あゝむとゝ出ひ拙ゝ海士も
約束ゝく洗浦ゝゝよて房婦
ゝ大屋とはせとゝ行ゝゝゝ
ゝゝゝゝ母あ屋人の鶏ゝよ
ゝ筆のあゝとゝ質ゝてゝ
あゝて吊ゝゝゝゝゝあゝ浪
ゝゝゝゝゝゝゝゝ夢人のゝきく
ゝやゝきゝゝ鳴ゝ牧ゝ子の娶ゝ

あさ志ほの浪のゝとよゝつきゝり
立浪のきゝよよきゝ、保門いゝよゝ
ゝゝりよゝきゝゝゝゝゝゝゝよ
ばゝ手師をゝゝゝゝゝゝ殺をゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ　拙ハ七母の手ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

鞍馬天狗

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふるくは「こしてい」蓋痛りや流石よりも高
ぶきは隈よは三男霞沙つの沙入字
をかくとうは名をも沙那王殿つを
ゆす蓋痛りや行方をたれば有も
鞍馬のすは僅の月　ひろ入もあさ山
雲入桜花ようの敵なんなはようう
おりて咲へきは蓋痛りのいるや
春　松尾花の松とひて少く雷と降雨
やあるる気猛雲よりきて鬼を
あとやはすれ乳をやタと弱し死
あるる鐘をやすしてうう返き奥
へ鞍るの山道の邪を知へあるる洪見人
入きを入や拙も洪る行侍して見を
ひるあとろのあるる時あるを高雄の

初桜びや樽いの侍桜だ
きの名ものを踊と方もあるへあて
牛上　去るくもあるへよまはをは我と
魅めるるるはるとおのりはりませ
入へ行をるるはき我洪山よ年へ
たるを天狗は我也　君兵はのあるす
を侍へて平家をもほ給へきあり
牛上　ものも思れは月し手人曹ヤへ
なるいて客僧天僧ものを客るるて
雲と踏くらんてゆくうう雲をんん
てどんてゆく　牛上　拙も洪るるるを出立よ
へへいはうす花桜のるへよ縞紋
洪の直衣入露と結て肩ふかを白
長刀服巻白柄の長刀　吟へは天魔

魔ヤあるたはるるるの山桜るるや
かるるきを立るれ　作是は鞍
奥僧ものを客よ年るるるる天天
狗あるる　牛上　侍は侍は狗はるきるそ
るるるは度を度山の豊前房　四郎
よ白峯の相模房大山の伯耆房
牛上　三郎富士太郎大嶺の善宮ら
一たるかるるるるるるも有まる
るるるるるるは良　横川　如意
う鐵我慢る洪の峯ものるるて人の
為よはるるるるるるるとたるるるるるる
るるるる川は鞍馬の僧ものるる谷よ
みるるる峯を動るるるるるるるの
音天狗たるるるるるるるるるや

洪るるるるるるるるるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

れ申はいとて此亭をとてもきに時
あの比の等にはあるて言もも詠
詠ともせ古跡とひ物柄とひ見意
をもちつりて逆縁の法をも
行ひて似た業根を示吊ひあま
とぐをもてせん具為に見送りう
き秋まりたり　拾遺集定家
郷のたく直ちくら前りや借と時あ
をとりしく宮ん哥ハつまのとの紫
やし　いや行き花宮あるに時あの比
の等にあれハ物てそれとやかく
去ぬるに時雨時をもとと云心をいつ
きりれ物き番ありきり新著月ぎりまま
とりり時あ物ん此とかきたわの

くの家をとかれ侘ハ今此亭
をやとへき　まとれもる宮ぬ
けりも時あ宮つりめお舞よ物
跡ま人ハあるまとと語れ
ハとを俗ハ舞よ　他生の縁ハ行も
見う一樹の陰の宮り　一行の流き
とはてたよ　心とをれと　折かよ
ハるも宮ち貴ハ時あてく
心をみも具人のれを知き
世のぶけりあ宮の行端の
夕時あるとよ海流も離
きうれとなくあまの墻ち見樹
露れ宮ちもくあとき夕
ありきもく　けれ心ち見ち

程よ墓所へしまりハ時まりとへ
りれくう出家れ望みてく人頼を手ふ
もちう　あるく見ハ石塔ハ俗人
ハまやあもハ石塔をとれハ皇ふ
ハたちよつ墓りひまくひ形もも
もを見ハりあくのちくうう
見ハ式ま内親王入洗墓みてよ此
うくをハ宮家墓とハ　あく南白
や宮家墓とハ物れなく謂みてハ
うあ物語人　式ま内親王りめハ
賀茂ハ女の官侍りなりを注あく
物りあをを宮ハを宮家ハ愚ひく
ハ琴り侍りしまハ式ま内親王程
あく宮ハく此給ひよ宮家ハ墓
心墓と知りくハ墓ようひまくひま
りくりこ制まやくハ墓よ邪輝ま
墓を俗程をりん吊ひをりりりとか
りまりをれまん　墓ものあと
うくのハれ奥の墓ハ山墓ちく南ま
通きれ露の世かりうりりの
ハ風をまれ緒ま絶ものをくねまくく
も墓ちりのようありハ秋の
花ちまハほまりりりて墓りりて
みりれくの中と吹く　昔ハあと
思ハりりハなのハりりりてもあき
あれれを霜ちりまりまを物景て
ハくまりりりハ山ひの海の流ハ月
あくをくハ此給ひよ宮家ハ墓
の墓りを忘せりとみりきりりりりの

感陽宮

扨此感陽宮と申は都のまゝ
萬八千三百余軍　門裏は地より
三丈高く雲を土のきてつきあを
て鉄の築地方四十軍　みなる所も
夏まで雲路をわけるかりねも濡
門もてゝるかゝ　うちよ三十
六宮あり三殊にいさて瑠璃の
ちこぶねの砂と地よい土き
長生不老と日月とゝもあり
てわひたゝし　帝の御殿は
房宮あり　ねの三十九丈
東西九町　南北五丈九
ほて　やれ雲丹

夫より　軍勢　の　ほ　は　ま
さりの〳〵金銀をちりばめ
きらぬ月月の星ふ桑天とやる
思ひてせの〳〵肝をぎしとやを
〳〵肝をきすしとや　思ひ
月雲の様衣ちは童あり常の
遠しては雲行宮に泊とう
高ては門様への夢をやる
縁をを愛はたくは　思ひ
君よたつ　やうきに思ひて
〳〵雲山の雲よ見て童ねやう
ゆきはるもたゝに感陽宮よ
きり〳〵　急ぎ感陽宮よ
見ていぬに奏中へ行うするふく

ぬやうよ奏南ドは燕の國のかゝり
よ荊軻奏舞陽やドの両人の者よる
れの様ぬてよ位を燕の行国のもて
并よ樊於期のかゝへを持く見て
事門ドて行やドう燕の国
の民よ荊軻奏舞陽と申両人の
者燕の指圖の箱ひよ樊於期の
かゝへを抱く事門ドたるとドか
ゝれめて行きの社おきねやて
奏中ドへしめよ奏中ドは燕の
国の民よ荊軻奏舞陽と申両人
の者燕の行の第ひよ樊
於期かゝへを持て行くし事門
ドて行と燕の国の傍よ荊軻

秦始皇陽とゆ女人の者指薗の
稲并よもんをきいかうへを持て宗
門きたるとゆ門ゆんに恵て
宗門さをんへ恵てゆんとゆ
を奏問ゆてあまに恵ひて宗門
ゆをよゆの宣旨ゆく有うをおう
うゆ大法めとくたりかくまで世
頼うへ恵てんゆゆよ常へゆん
恵ひく御宗門あれとの仲事よ
きゆを去ゆうゆ大法ゆうゆゆくん
岡めんくゆたうかまを行ゆて
宗門ゆをせとゆゆうゆゆてんて
たりかまを行うへいに秦始皇
たうりをまをををををゆ仕

ゆき 御大法あてゆいて御まつ
をうれへ御へをまをををを
みくゆ荊軻ゆ佩劍を解くゆき
をうゆ節義をうきを隠ひて雲
上遠ゆんわうをゆ金銀珠玉の御
階をゆをこ宮ゆ岡ゆのをうゆゆをを
薄氷を踏をうて荊軻ゆをてゆ
の御れ師ゆ立たる秦始皇ゆん
たゆをうきををををてのほう恵て
うやすんゆをうゆあふ免をうとゆ
秦始皇遠ゆへゆしをを御石ゆ
をうをてお殿をゆひをうをゆをく
をてあうゆをうゆをうゆれをゆうの
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

てお岡を窺ゆうを殲龍の蟠留
ゆををゆ 交理をうをてんをく
ゆゆををゆを橋ゆをえををを
ゆをゆくゆををゆく 帝ゆを
ゆをゆしゆ御ゆの節ををゆゆ 秦始皇荊
をゆゆ大家のゆををゆをゆを秦始皇
をを秦始皇ゆををゆく樊於期ゆゆ
をを黄帝ゆゆ流ゆをゆゆ立のをを
帝ゆをゆゆゆ氣をゆゆ心ををを
ゆをゆ 其時荊軻ゆをゆを
燕ゆ於燕ゆ御ゆをゆをゆを
ゆゆ立のをゆ 荊軻ゆ御ゆ
鋸の陰氷のをくゆをゆを脱ゆ立

おもてあるへきいろ　見て狂はすてまこと
ゆゑうへ行時は能あるつてあるを
られ人　はるる行はは能をまつ
きすすえれ　かすよ花陽宮人
蒼き紅曲を奏しをへ　はるへは楯を
うるひへしを来たること入泳よ
花鳥もゆよはるもまもやるく狂
入楯曲あれはまてやをへれるのを
ことはるうへはまもつはをけめ
花の美入きこうく花の樂よ柳花
花柳花花の寫入打あ曲入牧り
月の前入きへ入長ををつられ私
花蜜弁よはるは鳳金ことはた
はる色をもあへれ露の高つさ

たまりをくへ入よもきへ紅入
ををあへたりてきををけや君き
あやは七尺入屏風ををを尺をえへ
北斗敷技をもひれあどろきれ
はへ謀反はうをよをよ宮殿殿
しの沙ををけやをはへしへ
二三段入琴の音を君をやすめ
はれを前打はきををて花花
へをををはきれ眼れをへへへ
あり酔うへをを楯曲をひへへ
さなれへ前打ひへたれ音
独をひはへ屏風をれをへえ
電えへへきをををほひ露の
白ををんよれをへ楓手ををれ

をををはれ入沙楯をれ
へきはをを紅をへ前軒を
はへをへををきを帝よあを
をれへ黄入へへ華入袋をへを
よ入ををありとめきれを帝よ
へきをあへへ前打をを奉
華陽ををやはををを忍よ
へあひれへを長を要母を
ををを行へ七ほ奉入代
萬羅をををををを月を
きはをの琴をれ楯曲へへへ
きをれをへへ

東岸居士

見立遠国方入者へ我此狂へ
都よりかあのをなを一見仕て
よ入へ白清水寺へ手へへやと存た
れへをはへをれ橋ををへへあて花
よをへへ見へれ　見立愛宕へ
東岸居士を濃りはが梅今日はあ
楯成聽やれはを　をを新敷
四の小聽やをれはを萬入階目前
はを境冥あれ柳をへへ花は紅へへ
面白入玄の動をやあ　見面白の
こ入やは梅此橋をあ月へのを
へへたへ橋へを　見立先仰自感
居士は法冥無像は功力をへへへ

[illegible]橋[illegible]ばどよい橋よとくもいふ也
梅と東門西門[illegible]郷里をいつくし
成人の父母を離れて沙門出家するや
もつてのほかと同給やだに来きたる
所もきれば出家とつくべき謂も[illegible]
出家よあらねば髪をもそるべき衣を著
よ法もきて順ずるつつ道よ入る
善とみくも[illegible]智と捨くも
愚[illegible]捨よまき[illegible]とよわるる
自ら[illegible]橋を[illegible]
東門西門柳のかえ[illegible]
南枝北枝梅の花開[illegible]法の一をもよ
[illegible]為の橋[illegible]
門はるる[illegible]や[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

つねてゐきぬがさいく流を浮波の
ぢくらやつちくらつまくを百ちくら
百ぐ鳥飛くるえべおちくよ　あしたま
れくも我くゆくゆく　行ハ白川
行ハ白川の橋と隔てしひ　東門
こまぐ　西門　北ぐ波を
ふく浪　つかん　いかまもく極
楽の秋葉乃蔭の中まくぶ
まくひや極人よく　ぶく両白屋
南無三寶　文太戦もかつこも
笠ひくき　絲屋もよ極楽の花
きの極ひしやあと　行と行
とく　雲や氷く蘭つん萬ぐ
成文相ぐよく　ぶよく

教（索道）も秋津国　ぶく教ある
法を初め　異い六十余州よ
御経を初家立ててゐ我洲領い
南都ゆひく灵佛寺社弥勒
ぶくんめくまてゐよ　ぶくよう龍田
乃ぶ　行内国へと急きい
ぶくきいくれ大宗良乃教を去出て
ぶく月のくる雲まれ西の大寺とうく
ぶくてくや雲ぶくあくーのや
ぶ山ぶ雲ぶくよ　ぶる龍田乃行よ
ぶよきとく　ぶく　ぶくや
龍田ぶくぶく洲川と清く明
ぶよまくくやとぶくひ

ぶくとく行家流行うく人きくろく
ぶくきやお洲川とくくだくろ乃
明ぶよまくく家よ行とてくの
ぶくくくくくく　ぶくきも
ぶよ事行くくも神三要ある
為ぶくひやぶもなくて清く行て
ぶと人とくの中や絶ぶ絲く事
てくくくく　ぶくと思ひ出たく龍
田川紅葉みくまて流くぶくくく
錦中や絶くくとぶ宝乃心を
思くとや　ぶくれ事ひ言ぶ家の
水よ敷くきて錦ぶくくくく
ぶよ龍田川紅葉とくくく氷ぶく
いくれも中や絶くくと宣てゐ極よ
讀ぶきぶくくく紅葉よ限くく

ぶくとく家社ぶ躰ぶの極
きも言ぶきれくくいまめく
ぶ紅葉ぶもみくてぶくくなき
ぶ紅葉ぶもみくてぶくくくも
くく氷くく言ぶ言ぶくくぶ
ぶくく絶ぶ清てゆん　いやく
ぶもはとくぶく氷くもよ中絶と
乃ぶいまめくくめを　ぶくや
紅葉乃錦ぶて氷くもよ中絶ん
と乃謂言ぶくぶくやくん　ぶ葉の
言ぶ帝ぶ御製よきぶ家陰の手
よ龍田川紅葉とくくく氷ぶく
いくれも中や絶くくと宣てゐ極よ
讀ぶきぶくくく紅葉よ限くく

氷のも中つゆるゝの龍田川
錦織掛ふ月の影
も紅葉とうつす氷の鏡哉
絶てゆくゝ
よあやうきは薄氷を踏
とくを
拾はれはめ
見へ現そ
道
清
君
女
龍田の明神
どうゝ
比霜
みるきよ感
うゝ是は神
當國二
尚社
と神
神
龍田
龍田
龍田

[illegible]

豊かなるも偏に天社の御恵なり

[illegible]秋の四方のいろ〳〵千秋の

[illegible]月前[illegible]

をみる峯なる龍田川をおとや秋の

[illegible]山も動き[illegible]も浪

静かなる[illegible]この秋の[illegible]

[illegible]龍田の山[illegible]も移成りの紅葉

[illegible]

[illegible]龍田の山の朝霞[illegible]

[illegible]

[illegible]

き前よ幕とかうまを人長て作
いうこに付家べくよ始めぬくもれた
我兄の藏をのうてたさいぶうら
あへくる幕入くら見と弱かくる
有様みてい扨よまき人の中よ
弟兄八弟の幕の門程あちひくくハ
まし内人今よ始め兄の藏を
う拵る増い有増くい行ま
そいう あくい情ありや我くハ
行時を長くく下ハあくい俄祐経の
事いよ 三郎くう暮と長くくまハあ
ま扨拵をいつ迄くくへ作へ
どもかくも知るへき拵よ定めへ
御淀へくくいをいつとうきあれ

へきいへ扨よくうかきに俄者を討へ
もれあてい引しい幽くへくいぶくハ
うきよ御定めへやおもひ出
たる事入作我る故郷を出時
母よかくくもやきひん程よ歎き
うへきうの兄めを心よかくくい同兄
弟か国三郎の兄弟よ一人笹の拵を
おを故郷へくいうまるみくい
ゑ見ハむてい去まくくい一人緒
まとやくう定めてとく申へ
二人去よいスーあてくくと長い
むをくいくくくい二人去よ洪方へまれ
とくくへくい長てい国三郎の兄弟
此方へまへ長てい国三郎の兄弟

是へまりてくくい国三郎兄弟も
拵よ国世兄弟よくくきいをくくる
きうの影くくを長くくくまてくく
よくへ見ハへいめりきい御淀めく
行ドくくもいへ長を肖くドハ有
まくくいいくくくや拵ハ影くくを
きいう長てくくくもいへ淀をハ肖ド
まくくい 此上ハ妻諸くくへ拵も
我くくう親くくきいドハ俄祐経を今
長定討かきにいへくきあくい兄弟を
御成まくくいい故郷の母歎を給くくい
ハくくよ痛くくいいよ笹の志くく
と持くくニ人ハくくい故郷へくくくい作へ
見ハ思ひくくもくくいへ淀をていハあ

御淀ハ思ひくくもくくいへ淀をていハあ
ちをスドいくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

迷ひつゝ思ひもかけぬ此世かく計りなる
かりそめの浮蜻蛉の命無為なる行末も
秋の日やもく暮りて雲の
古郷の松のひゝきも物すさまし
風よまたなをやをしの入きゆく
思ふらんてぬるもとゝれなうも
のやうにうたゝ人もあいなくよまん
とう思ひ侍りしかは人きいきゆて
水の流しの絶りもてしく彩れ
花ゆゝしひしりめやと夢よ寄り
てやうにぬりつゝ世もかきまし
やうよそをく いたはしく
あもとかゝく月ゝてゝ
つゝ法華やく法の拝絶ひ常

水の濁り江よひ枯てゆくすゝき
穂もも優なる雲の行方道とをく
そ世もつきぬ絶を
ゆく 隅田川僧の人ゝ
うきて僧の海の
けぶりくゝ
えるのまゝ 用る法華の
きも 家成男子の願の
ゝ哀の祇園
まんと云と思ふ音羽山嶺の松
ひかうひ 世ゝ
遊ひもの 隅田川
出るとおもふ
まこうをよ

隅田川

昔武蔵国隅田川のわたし守
うくいとなみ舟を急き人をわた
りやとなんぞ洗在所よ去る細
て大会仏をとりの人間僧俗を嘲
ひ人ゝをあつめ其由皆を心ゆく
来を東の極寒くひももるくの
ろろれ 加候去者ハをやとの去
みそ我東よ去る人の人を彼者を
書て雲震あと
を山よ都てゝ
もかゝ風ゝて
隅田川ゝ
忘れ行よ見ゝ

みくにのよあまとをれし身を思ふ
ものやとねいるよ船頭はあれよ乃よ
もろみく作 中の子めされ人
笑ふ出人あつのぎしかるは和泉ハ
行幸そ作う 男 問ん都より女
和泉ハ乃ひ夢ハ思ひ面白う狂ひ
とんよ 母 扨ハ狂ひ者ハ
めて仮ハ狂と侍ひるみくい 女 ものや
人ハ親の仇やきよあるはずもなと思ふ
通ふ来 女 ものハ狂ひ ものの
通ふ人よ ことつて行ふと行ふ寄め
恨んぎ やいうよ乃ハ成ハ乃
狂ふ音ずるみくひあつ 女 蕎ふ風
乃露のよ 女 を恨ふ ハ

おうう人と寄て下女者みくい 母 都
ハ人とハ狂人とハ面白ふ
野ふ狂ハ此母よのそ
うてやる隅田川の渡し寄ハ
言ふ母よのきとう承るへ
ふくもの者をふよるを承
つもとみ行つて寄だほ
事ハ賞ひるよ 母 ふ乃人と
ふ 母 ふ
其ふ心なこ ハ 母 ふ
似言平も此つうてふ
いふ事とふ都鳥ハ思人ハ
屋ハやとふ乃ふ人ハ
ハ乃ふ乃ふ

を行とハう 母 ハたう仲の鳴人よ
うてやふ浦ふくハ鳥ハ
いへふと此隅田川ふくふ鳥ハ
ふるとハたへ給ふ 女 と誘う
ハふりふ前よはふ心ふくて
都鳥とハふへハふく 仲 鳴と
夕浪の 母 背ふふる言平も
ハふ乃ハふとふ
人と思ふ素 ハふも東よハふ
ふ心とふ同し心乃 素と恋し
ふを言ふふる 男 ハふ
ハれも 我も人いふふふ
ふふ都
ふふふふふハ東路ふふふ
ふハふふふふふ
ハふふふふふ

[illegible]鳥邸の名をやいひくまうしなどや
[illegible]きれば[illegible]の行の[illegible]
[illegible]ばかりなれば
見かぎる隅田川の凍まさて思へば限
[illegible]
[illegible]
[illegible]

きゝ着て洪和ほう寿めるまゝ行くへ
をよ都の花ハ夢うや意味まゝやに
言語道断のうつゝかゝるれどをこ
ようの事とそなく人ハ
ゆくゝゆひきうやゝ悲痛うや仏
仏人ハ墓所を見をよ山へし洪方
へ歩へ　今ハ山ハけりをあうと
頼みをとう去るあ東より下またる
よ今ハ洪世ハ物さ弘乃路うう
みうよりくもしんや死縁とて
生前をとうく東ハをの道乃過
ゆ去と成て蓑の草のを生前う
なゝ洪ハよ去るうや　けりとてハ
人ゝ洪去をとうへして今一度洪世の

海と母よみをさを世絵やゝ物うても
ひうへきゝ命をとて少くあうへう
ひあさまくきの髪うくれつ面歌
乃ゝあのさよのあらひゝ人間う色
ひの花さかりゝ芳乃花音うひ
はゝ長長のゝ月乃景うを乃雲
れほうう実目のまへゝ食少く
と行と御歌きんひくもうひあさ
ゆ芳く会をはやひてゝ世を
はゝひへまとよ月くゝ行ゝも
ゝや更ゝ去ゝ長会弘乃時節あれ
ををんくくよゝやうをとあう
すゝまへ　母を俗りのかるけう
よゝ会弘をさへ申さひして哭ひき外

て後悔ゝう　引うそやおよろ人
れほくまうまゝを母のとうひ給
うをとうゝ亡者もうをひ給へ
きれとをやうてを母よ事をれ　神
をれをめときをきゝ人洪方も魂鐘を
とうあきて　歌きをやくめうゝ
ゝをや　月乃長会佛をうをもよ
心ハ西へと一節よ　南無や西方極楽
世界ゝ三十六萬億同号同名阿弥陀
佛　南無阿弥陀仏南無阿弥陀佛
南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏　隅田
河原ゝ浪風も聲たゝく袖をあう
仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀
佛

うをうて北ほ上ひあうゝ仏南無阿弥
陀佛南無阿弥陀仏　引うゝ今
ハ会佛のうをうよまはうゝ神をの
数のうきをゝ此塚の中をゝ有を
みれよ　引ゝ神ゝもを模よゆてハ
所詮此方ハ会佛とハ留めへ　母
こ一人ゝ　と一老社きゝ面
ほゝれ南無あうゝ仏南無阿弥
陀佛南無阿弥陀仏と老のうを
ようほうをうよみゝきれを　ゝ
神ゝう　母ゝ　ゝまゝ
たりひよをよてとりかをを月ゝ
くと御行へよゝ思ゝうまゝ
面景もまうゝ死ゝんかれゝ

[illegible]

[illegible]

雲林院

藤原松を紫の雲のごとくに雲のやうを
寿賀　昔、津の国芦屋の里よ
ごとやう者ゐるに我初めてこの
ようにて伊勢物語を手引て廣く者
おこうさ成宮夢と蔵てこの程よりは
今都よりこやと歌　花の新よ
用ゐる日初陽国へり身の考く帰る
時薄暮くもまとまと言ひ月の都
よ立くゐりり声やの里を立ちく
我が家よ新きよ多弱の月の西の海
堀のひるこの浦をしく松陰よ
煙をうく居湾ッく言くみしくる
漁火のあうせとよ和歌津咲や

此花をこうくゐうくよ歌の遊
りくし注は梅よまきれあるこの村よ
ゐよきりく　遊よ人家をみく
花ゐれをすゐくよ人なきはとず蔵よ
立うの花を行きは　ゐうやう花打
きぎよゐ　ゐの震情まくこの
宮ゐ家のゐよ義はよ掃めや家用
しゐきゐよ社きぎまくこの用ゐ咲よ
花をくくき夢の羽用は遊ゐ村の
郷賀ゐ人ごれうあるゐ寺の花ゐ
ゐくゐ行ゐ敬くこの花や家れ弘
人のゐ蔵華狼籍の人くこのき絵く
ゐくれ花をくて遊山を宴ぜを敬へ
き花ゐ行くこの花ゐ

花ゐくき花ゐれ花ゐくこの用ゐれも
花ゐくと社くせだと花ゐくこの手
ゐ家ゐくも行くこの人よ　行くて
素性法師ゐくこのや人よ語ん梅
花ぎくくゐく家五高よきんよ
みきくゐ　ゐ行ゐくんを方よゐる
手よぎ用ゐ花のゐくゐくゐくく
みぎゐくくやくゐくくと宴やを去
れ花の一時をゐ人まくくくと花清
書月よ影ゐ顕萬顕ゐゐくくを賓
と思ゐ洪花をゐくをゐ中ゐ花ゐ
ゐくく先ゐれゐくゐ花ゐいゐ色ゐれ
ゐべゐくゐ花をくゐ衣　きゐゐくゐ
ゐくく陰くくゐくを動くを人ゐ新きゐ

[illegible]

春日龍神

月のいりあもるうらのそらくれ日の入
國を寿ぎ　早川　見へ梅尾の明惠法師
うくに和入唐渡天の志有ようば
脈との為よ言ひ明神よまうやと
思ひ明人今南都より向ひ給ふ豪宗山
ちさきかを[illegible]ようそよ[illegible]
[illegible]の松緑[illegible]も長閑なる
都れ山と沿よみく少も南の初路
やまあれ坂都くこ笠山ま日入さと
ようまうら　晴たく空よ向へ
和光の[illegible]たり　[illegible]
動さ形を現して[illegible]
を頭一[illegible]

[illegible]人間長人の色[illegible]
方れ天の災や根の世とやう月よ
[illegible]影を島垂れ二柱[illegible]社の搭と
[illegible]の代りれ
[illegible]水屋の[illegible]
[illegible]森の松[illegible]
[illegible]
見成宮つよ人き事れ　早川　や見
梅尾の明惠上人[illegible]
[illegible]
[illegible]

なりぬるあさ　三笠の森の草木
紫がくれもゆるあよ　梅を手折れば
鶯の鳴　弱たる鹿迄も皆悉く出向ひ
鶴と打角をかくす事を人と礼なるもの
が社の辛物を見あつるも流れ降る
いとくうるはしき武蔵野の果　あの
やはらぎ　我頼む神のまゝ
止りて神慮をあらためたりませく
早速　當時　手妻にあかるうく
多くよ入唐渡天をしつゝ伝法流布れ
名をとめ　古跡を尋ねあそかく天
竺山を経へくは数山よまつ入
又堂山のちをあつへ笠形を築波とあ
すへ　昔八智恵山へうき宮はを

度をとそ大明神と示現　此山よ宮
所　給　又　即鹿の大山　此書自乃
山　ぶ　ぶ　秋　三笠　釈迦手
居佛　ゆ　ゆ　ぶ　紀月の　を　聖
人の内神　詠　た　多　紗　を　稽
ひあつ　慈悲　萬　の　神　僧　ぶ　ひ　を
照　故　あれ　や　ぶ　機の　度　れ　益　る　き　を
出　ひ　手　ぶ　孫　猶　の　衣　を　脱　鬱
幣　殺　衣　を　つ　ぶ　諦　の　ぶ　を　説
給　鹿　窟　も　宮　あ　れ　や　き　自　殺　よ
紀　神　八　鹿　の　園　ぶ　ひ　や　ぶ　自　社
の　有　様　の　山　に　笠　よ　隠　さ　ん　や　ぶ　れ　日
う　あ　る　よ　顕　き　く　様　を　と　も　よ　き　日
殺　宮　殺　も　ま　あ　る　や　果　り　な　さ　南　れ

太寺月をみく　光　う　増　る　七大寺　所
法　の　花　も　八　宝　樹　の　都　と　く　春日　殺　く
去　社　の　と　き　う　久　孔　早　行　宮　給　き　所
や　武　即　光　を　神　詫　と　思　日　宮　め　く　此
度　の　入　度　を　八　ひ　と　所　入　し　使　く　れ　る
い　う　所　入　う　ぶ　名　武　あ　う　給　よ　る　し
入　唐　渡　天　を　と　く　ま　り　給　く　三　笠　れ　山　よ
五　天　竺　を　う　う　摩　耶　の　誕　生　仏　耶　の
成　道　鹿　野　苑　の　説　法　雙　林　の　入　滅　迄
と　く　と　を　ま　る　し　猶　こ　よ　物　語
く　な　仏　宮　の　神　乃　告　我　八　何　も　秀
行　う　て　か　き　ま　ひ　や　う　ぶ　よ　き　う　く
早　神　詫　き　い　よ　あ　く　あ　る　少　く　色　ま　う　よ
早　ま　そ　う　ぶ　自　の　野　山　入　善　又　れ　ぶ　家　と

ゆ　く　あ　よ　し　ま　も　仏　れ　と　あ　う　ま　れ　し　き
な　く　し　時　う　大　地　震　動　し　う　八　神
界　乃　說　下　の　し　ま　今　う　す　く　獄　大　龍　よ
孤　陀　孤　王　陵　雅　及　龍　王　安　休　龍　王　龍　王
和　修　吉　龍　王　德　叉　迦　龍　王　阿　那　婆　達
多　龍　王　百　千　春　屬　一　も　く　ま　平　地　よ
波　瀾　を　そ　く　ば　乃　ち　屋　よ　出　来　し　て　所
法　を　聽　や　ま　れ　且　又　所　法　堅　那　羅　王
成　ま　い　持　法　堅　那　羅　王　よ　樂　乾　闥　婆　王
成　樂　音　乾　闥　婆　王　樂　那　阿　波　羅　王　羅　候
乃　羅　羅　王　恒　沙　の　眷　屬　一　も　く　光
し　国　都　所　刹　り　龍　女　立　ま　す　波　瀾
の　地　く　白　砂　ま　れ　や　和　田　の　原　乃　ば　原
白　玉　立　八　み　り　ば　ま　と　て　う　う　る　屋　や

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さのこしまめ〜そひ給ひそとよ假名
優婆塞菖蒲城や新田〜久米路の橋ハ
いつよ　なとしへさ月ふ〜ねれ　拙も
世のうつきの名所　一言葉ふくやし
まやぶ幾度を岩橋の　おもひ心
ようをたゆ去なく金有ふく
て菖蒲やうれ作るあ岩橋なハ
濁ん中そ〜〜〜〜　見ハるさ
まの日八長屋さ水の舟橋よ〜て柱
をつ〜ふ〜〜〜〜の新見を作て
給へ山伏　有ふ風しなの〜〜伊勢
名濁り〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜

よ罪のやどる浦ぐ玉ぬれ月も出つべ
「五障の霞の晴かくさぬまの夜入一時
胡蝶は夢入たりつまとよびて〳〵姿を
ゆえやさえ」「手や蓮野の山ゆ〳〵と
もも味堪の守川の　橋入とうし出
なきるとゝ白波入るゝ〳〵
南る別るゝほ船　出ようゆ思ひ
妻背るよ南ひ別る船橋の夕べ渡る
夜の月もゆるそよ更ゆ〳〵
「人をねようう〳〵ゆ出ひし
〳〵ゆ逢衆の向ひ月よみて月る
人数をしゆ〳〵ゆ月やだの月風
青ほよそ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵中の〳〵橋
と隔て立ゆる波のよるの橋ゆ

ゆ紀の沖あひの風を〳〵明のくまよ
離れる板ゆと踏ゆ〳〵ゆ〳〵と音く
深きまゆ　東路のゆ入舟橋ゆ入ゆ
しゆやしゆくまゆ〳〵ゆ逢ゆ〳〵
執心入罪ゆて知〳〵ゆ三途の川
橋ゆ橋柱よゆて〳〵ゆ要ゆの動色
よ替ゆほゆ〳〵ゆ生死ゆの妄執邪
婬の悪罪ゆ〳〵ゆ〳〵ゆと責ゆ
患よゆ門ゆと行者の法味功力よゆ
真ゆ数心ゆ橋の真ゆ数心ゆ
橋入ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

源氏供養

家と同じ道〳〵石山寺よ
ゆ〳〵「昔八安居院入法華ゆ〳〵
我石山の観世音と信一常よ寺と
もこしゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
時ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

と書いて、聊や此世の名残にもあしかれと、名を埋まむ苔の下、石山寺よりまつ雲の紫式部にてまゐ
給へるの、いつしかやがてかうむりさせたまへりけるを、やがて御覧じ、日暮れてきれば、
かくれぬ前に、とてやがて御覧じ、夜に入りてきれば、
拝をはじめ、まつ、べき会釈をいとかしこく終りぬ。夜に入りて、鐘の音心もとなく打鳴すに、源氏
の御法師、かの御使を、のべて紫式部の、宮殿を深く、
とまゐり、
世を思へるもいとかしこ
のく、夢まつ、ろの、紫なる花も
一時のあいなきものなれば、消しいとへの光源氏

と、涙ぐみ給へるを、
世の人の心と、
ねもなく
ありし世の、夢の、ちの、
鐘の音に、
燈の光源氏の、
ゆくへ、
いかに、
と、
思ひ給へ、
世の、
ありし、
昔の、
紫式部、
筆の、
軸に、
まきて、
ぱかりと、
言ひて、
宵へさして、
ありしかの、
紫式部、
日の、
紅の、
ありさまの、
ありしよりは、
ことに、
取り、
ありしよりは、
ことに、
胡蝶の、
ありし、
花の、
色の、
かな、
紫の、
ありし、
日の、
ありし、
一生の、
夢の、
ありし、
花の、
一日の、
ありし、
家の、
ありし、
紫式部、
頼みと、
聞く、
石山寺、
悲しと、
涙を、
絞りて

絶えぬ樹の花ならぬ蟬のこゑ

世をそむきて山ゐ負の袋の入を

観じ給ふ法花経の八巻

高きをばそなへ賀の秋の落葉もよ

しやうぶ風に佛意よあいしゆう

[illegible]

花ならぬ宮ゐもそなへて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我君の御ちから御恵とて御位を治ひきさくはちうちく仕
み是成はかうて御犯罪とて他よ
まいりをよとしてはるるてはなれく
[illegible]へ　扨も我君御位よつを
治ひ給への御ちからをひしくとして
[illegible]
月はれる孫ひかの世よりハ長くへき
[illegible]御名誉やはりを思ひ
長れとして御玉章を孫一直を
[illegible]
[illegible]我應神天皇の孫首と

[illegible]帝位をとめをうまあ
[illegible]
[illegible]天照大神の孫孫あまた
毎日よ伊勢を祈したてまつり
[illegible]
[illegible]感乃至りるや君臣のえひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雅楽のきこえやまの風とよみて車のやまとへ
いとく白雲の高間の山のようなるを
みくるやまのあしたのあさ霧はいとく
市とりの山日の本なるまやゝ大和あるくに
ほの都よりとくまりの宮はあるこの
海あまきやゝ門のうちにあくもぬ
京ようき海の中のこのまゆゝたひを
君のもとり高く海をもとう黒髪
乃ぬきもとり別路のあくるこのの
うちなるとて鹿の起伏堤のねくおを
通ひゆく秋草れぬくれ山をれ露
ちくぶほの官よりをりく
時しもは長月やまとき所雨乃いろ
うすき紅葉乃市幸の道の島よ

非歌といまめ面とよみ市幸の市を
を清めきり けりあきたるよりやとよ
あまぬひあ人乃ぬとらひ和人とらひ
ばくう心はるのとれをみ
露霜乃市幸のちきよすんきり
みしきやあ長さ風人よかすり方ま
ぬとみて見苦しやとて宮人立
より拾ひきりとこのさんへ
かれやあれは花筐をとち落ちま
てはかはやよ 仔と君乃は花筐を
打落ちまたるややあ〜風ゝの
事やゝ いとに狂ひ狂ふ花かを
君は花かいとして渡とるかを。
あとはたやとやう

しきとりの沈君あるて月本
よまとときんのまいまうへ
我らは狂人るれは君しと思
ちくくりきなくも沈君は憑
天皇五代乃れ孫るうは地
國乃あち面のと申山望よ
あくの皇子とやしか とは沈國
ほ乃ぬよ 継躰の君とやや
ぬきはかほとよて方き君の
花かをを沼きもなて
落し給ふくとう 我らもは
あくるひよ ちくくやくせる
世よ乃ゝとへ背月は地よ落と
ちくちくあ花くを世乃ちくれ

やくうすのよ行くくなくて天の
とうめもたちまち詩やくうなし
てどかとくなるは乱くものあ
まくとくれりきふかくはよいきま
すとくれりきふかくはよいきま
さを絵のかさか様よりを紗くうく
うつるさ花筐かくやはほと焚
沈君いまは其比沈皇子のうまれと
あさくの御前花とを向れ
南無屋天照皇太神宮天長地久と
やうへりきくひつきをあはさ玲
給ひれ面影をよくひ見わをれ
秋乃まてもとれくくやくひくや
陸奥のあさかはの花くをかし
くて恋れの恋のくちくもり誰ひそ

孔雀心は君にためぞ寄よ者てうよ蘭
ある月の契りなりのきしてゆ紅のもう
ゆきしぶ春もとられたと徒よ水
乃月と望を撫乃こうくて呼び
みて帝君うくめ月よ狂女
寛白うく有て御車ちまうく
いるも面乃狂うく舞遊びんへ数
流るきとの御るまてあうこいそ
ひうく狂ひ仏へ引れや梅乃ひ
あうけ影とれうんやへきいけや
狂んもう者よ御幸よ狂ゆ
うう　ひうさとうつたもうあき
漢王ハ月ゆ行あきと歌き花

おうまつうと計さひうく舞の行く
も侍よ月思うの原ゆ高孩とめ
まうまま丈人ハ紅やしの花めうちひ
寒へてたまうく露の深乃うちれ
鐘のかきどちて終よ帝よんし
給ひして去たまの御門乃く
歌かきはつ異れかうとす泉殿の
かへうつし秋を畫圖よ立ひして
明音歌きはひまりはきたあうく
げ思乃ハまりきたあひひかれひ事
まうきとかく歌き給へはきうと申
太まのうときかくまうまひう父帝よ
そう狂のやう　まま丈人ハ本ハそ
ど寒れし侍高くひいうくの仙あり

且人間よりうくとハやをうも絶よ
もと乃仙宮よゆうの泰山青君ア
まうりうまうえ人れ面影とたうく
雲よまれへしとて花張れ中よ
たく衣袴音をたきうう狂きへ
たうまうれをうあん月秋うう
うれくう面影ゆううあうさかよ
かまうへ狂いやまうの男立ハ玉
よしとう白露のまうもたまうて
狂もたゆうつうう清めきて深
勝侍楊うへ書へき方あう
ひうあうまうはう丈人乃ちん
あれす泉殿を立ひうひ帝うき
殿をうううひうるきうひまうきて

花筐を狂ひうう狂とかうく
あうう異花筐をまううをあをへ
狂りめうよ胸ゆうりうう帝あう
花かうをとううあうまうう
帝ハ色と数流うて髭ひもあう
田舎まうく御手よあまう花筐
狂あうくうう直狂ひ狂章
乃恨をとわうひ狂乱をくめよ
本のうくたうつうんとの宣旨也
宣うう狂やはゆくひ直あうれ代よ
珍ううもどへたうもしかを
乃うく　狂ハ色ともよ時よあう
花の筐れうをとめて　立うき
人のまあうしあを　かをとうう狂て

富士太鼓

是も萩原院に仕へ奉る侍也
拙も門裏七日の管絃の古事を
よそに天王寺の舞の面と申樂人
ぞ有ける ひなさたいこの上手にて
ありしを 富士太鼓の役を仕る家
に住古より富士と申樂人ぞ也 ま
ぬ太鼓の上手にて管絃の役を
ちとせ経て 洛中洛外に富士流
の面打ぞ也 面白き名也 古き
手ぶりの舞の様 面の撤をゆら
とゆへば 富士の煙のうひやうをゆ
ゆ時 ぐるぐるとなさふ 成
ぬ りなれば 面はまさしきものを

勅使 ようり堂て富士の者
ものぐるはしく 面此りしを 俗富士
きりの振舞 ありて 俗富士
ようをぬく おく富士をつくる 然よ不
便の次第 てんやうのの
おさるうんまし 寿 ありてく
敢 とつめさてやと 雲上
ちと 面打る 富士 伝 を 寿
奥 律の 面 伝 楽人 申
人の妻 やまとくに 拙も門裏 七日
管絃の 天王寺 舞
楽人 ま 也 ぬ
太鼓 役 世 ぬ
ぬ 真 ぬ 都 し 有ま

夢 ぬ 月 雨 神
ぬ 拙 ぬ 都 ぬ 思 ぬ 雲 井
やうの 古郷 ぬ 住 古 ぬ
陽 詠 月 蓮 ぬ 城 も
や 面 つ 笠 ぬ 情 ぬ
掛 笠 ぬ 夢 ぬ
ぬ 遊 富 山 ぬ 拙 ぬ 急 ぬ 都 ぬ
沙 面 て 富 ぬ 行 ぬ 寿 ぬ
ぬ 業 ぬ 是 ぬ 富 ぬ
者 ぬ 富 ぬ 拙 ぬ 行 ぬ 為 行 て 有

う恥ゝあゝ妻やみうゝ
富士うたまてよ付と富士八討
たゝとゐや中と内富八内の討
て山井八社男る合そし夢ゝ
童てとう与ゝくよ清内の討き青ゐ
くけもれ高さゝ八ゐ敷煙と八所
ぬう熟へ今き歌くよ其ゝひもゐき込よ
ゐゝるまゝ踏ゝるかゝよゝゝ知をし煙
ゐ与知ゐゝと甲八歌ゝもうひゐき
る。そゐうう見社ゝゝ舞の装束
よゝき人の歌きよ形ゝよゝたる事
あゝ見てみくゝと慰めんゝ海
迄を行ゐもゝるゐ八ゝ童と田八寄
ゐと思ゐてゝりゐ与ゐゝとゐゝよ縁ゐ

うき島甲月日も替ゐ持衣の鈴よ
有をあゝ八社痛ゝや似人出ゐひ時
ゐゝゝゝやゝゝ天王寺の楽人八ゐそ
ゝゝたゝゐ八勅宣ゐきゐ社ゐて長れ
もゝゝてゝゐゝとゝゝゝゐ似たゝへし
異ゝゝゝ天ゐ當社地給の楽人ゐて明
神よ仕へゝゝへゝゝゝゝゐゝ
ゝ志ゝゐゝゐ頼ゐて出ゐゝゝゝ
動ゝゐゝゝゝゝ其ゝ立ゐゐゐゐの
ゐ八匿ゐゝゝゐゝ勇てゝゝゝゝ
ゝと思ゝゐゐゝ有へきと思ゐゐ
うゝまゝゐゝゐゝゝゐゝゐゝ
ゝあゝゝ今変ゐゐゐゐゐゐ
ゝ歌ゝゝゐゐ長ゐゐ

せうゝめゝやゐゝ姫ゐ八ゐ妻ゐ歌の
作ゝゝゝゝゝゝゝゐ敷ゐゝ社
ゐ男ゐの作ゝゝゐ忘ゐ者ゐゝゐ
ゐゝゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
人ゐいゐゐゐゐゐゐ我妻ゐ
ゐゐゐゐ敷ゐ恨ゐき八ゐ敷ゐ
妻ゐ歌ゐいゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
の歌ゐゐ討て恨ゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐ

皇帝

春の宴遊に入てうたはせ奏し
しば宮の内まい三十人ゴ二十人
瓏漫一えよりかぐ類の黄妃の
紅色美菅のくれゐ弁いろうへて
求央の柳の力をもつ　ゐ
よりとう栄め露の命もつかん
心つくしの美人夜のかぐ求人の
月も瓏かく雲弁より帰る鳥ねも
わくくくみや鳴るつかの宴のうちめ
ゐく桜ゐくよりきいなうゐく
かつよ奏宮へきやめん　かよ
やな宮中ちつまうゐちして心をを
まひれ鳥ゐみくもくにゐるを

たれはもつきゐる者人也ども
はるめつゐる者ゐ　是八伯父の
清附よ鐘楊とつひ者ゐ　ゐ乃第
かゐをあるをと欲きゐ玉堵を頭を打
ゐくきゐを侍よゐき者で七公を
迷まりたり　宮去ゐをとす也
其まく都の中よゐをめ贈宮をゐ
ゐ大臣の其七公を行ゐ為ゐ
今宮よ敷きゐゐ　宮ゐく志
ゐ其ゐ贈宮のゐ緑袍を配
骸よりゐゐきゐ礼よゐかく君
ゐ瓏愛し玲貴妃のやまをゐ
きて寄物をゐきめやへしゐ
ゐ侍礼明ゐ鏡を仮清机よ立をゐ

給ゐのゐくゐよゐと駆ゐんと　上皇直奏
ゐくやよゐく我角力をれゐつ
楊ゐ妃ゐ妃ゐの姿ゐそ月をつめと
ゐもゐつゐ其姿みゐゐゐ
ゐよゐゐく　貴妃ゐよゐ
しゐ曇目ゐゐゐゐゐ瓏月夜の
晴ゐ心ゐゐゐ　宮ゐ宴ゐる
礼ゐゐゐゐきゐゐゐゐゐ心
よをきゐゐ涙ゐ窓ゐ玉葛ゐ礼
姿ゐゐゐゐ　ゐゐゐゐ礼ゐ
ゐゐゐく昔をゐみゐゐゐゐゐ
てゐゐてゐ　ゐゐゐゐゐ
ひれゐひや　翠翹金雀ゐゐゐく
ゐゐゐゐ礼ゐゐゐゐゐゐ斜

紅入世よ類ひなき海がらや玄雨れ
ぬよ志ゆらかいたりのはわるの花の
ゑくありの玄さあれよ明宣栄花と
極め世をたらぐ多とれを山絵よ
ゆ行ゑうひ玄き貴妃よかく撃りを
こめく年月入鈴霄やしかさと
苦ゑ玄く日たくおさして明ま
里ゑも絵とゆつるかこなき中
れとおうきかゑゑや世中入風
ゆれと入りきかゑゑや世中入風
きあさうう明の月の松のゑく遠
まあひ弱きるかもあぐ和曲つえし
笛作はとふきあひやこ入撃の笑
あく地久きてつる時もあるまし
宵
ゑと思ふ玄ゑうゑ彼考入のをくれ

ゑく明王鏡を玄物入の汗枕よ
をくきあり初後をつも弱入
玄と月郷雲客一同よ水王鏡を敢
物世枕色さかをきやうゑたて
ゑくて社をきゑうれかくて
暮ゆ雲のあゆくだゑうゑも
冷くゑのきもよたつわゆしよ
ゑゑや鏡に具ゑちを冤朴入海
ゑうゑきる鍋九ゆつ振と押入
きてゑく彼け枕よよたき入笛
をゑゑ抜とゑいゆきゑろよ具
動やゑうゑみきれかゑく
見と数洗ありて拭き病冤よのか
けゑし鈴と振て玄絵入夫よあるる

地よまゑ下冤勢行自社を引て
帝よ向ひゑうと玄を溺とゑう
あきゑう絵入沖殿の柱よ立かれ
て海もみゑ玄ゑよきを
墨家宇ゑわく宮中ゑうかゑや
きゑく鳴動ゑる社ゑうゑきれ
社皇入武徳年中よ贈官ゑれ
し鐘馗大尾入精霊あり梅も洗
君鍾馗像絵ゑ玄紀入やまゑを
たゑうきんと通力とゑゑく寄殆
とゑひ南無天秋星王我鈴門冤
や社文ととあ駒よ奇ゑ廣宇と
翔ゑてしまゑきり玄惡冤冤と入ゑ
よりそゑゑく強きさそ彼まゑ

柱よかゑれきゑと鐘馗精昊馬ゑる
ゑうたゑ利鈴をひゑけき抜とかゑ
月玄鏡よ社ゑひ絵入冤ゑ冤ゑの海入
かれれ冤ゑ通力自社も
ゑきてゑく社ゑまゑひゑきを
ゑゑを抜ゑゑ絵入殿をとひゑゑ
玄宮入玉堦よ玄ゑゑうゑ
ゑゑとゑ社ゑ利鈴をゑりあけ
ゑゑうきりきゑし底よゑを
すく怨貴妃も良冤社此君の
ゑゑんをゑゑゑ等ゑゑゑとなゑくしと
玉冷とあゑだくまゑりゑくて海
き尊ゑゑゑゑゑゑりよきを

昔こそ阿波の鳴渡より一夏を送れ僧なれば海士の釣舟かよひまも浪の浦八平家の一門景綱なる所なれども痛りくあまの長洲破邊よりくゝ経をよみ

なみだをもよほすやうにて面白き浦の秋の亂れ所なれば少し波のおもてを押へて櫓やもとゝくく漕ぎ寄せ

行末の日数也いたくまて世をいとふ人の海士の釣舟かよひまも浪の浦八平家の一門景綱なる所なれ

ばとて

月の出塩の海水みなぎりて面白き浦の秋の亂れ所なれば少し波のおもてを押へて櫓やもとゝくく漕ぎ寄せ

暗涛

ほせのわたり悲しく月をなんて清光あり

まのかりの夫をなんて哀なり

あの雨の音聞よ

ひるあもあり

[illegible]

たゞや洲ものとて中よ音すゝ八海の

定めぬ海士の釣舟かよ

ひるあもあり

[illegible]

隨ひちりゝ

二人の僧八岩

ちの入よ

いちりゝ

[illegible]

火の陰を慕ひ経を開き讀誦しる

[illegible]

しよ

よりき燈よ

[illegible]

弘經深め海潛劫のきえんよ

ようく五十展轉の隨喜功德品

受ありの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

む武士ども海や塩かいの業
なりとよりまさり　月毛よ小宰相
の房乳母をちつきめやと行とかの男
我まもりき人くの都よりまの角感
討あらんと頼みくまりつへき此海よ
流をとて是後をまと敢組
つるのうを　出あてもつれ海よ私
まつまとめ　流人きうれたるや
海の魚て海ウ　西ととへも月
人ぐ基方もみひ大方の蛙の
ちや殿ちんあるも芸よ曇る
乳母ちくて此時のわ思方武
一人よ限ひちりとまりて沖衣
の独よりつとりまと海人と

たく考人も角ちう塩の底のみく
つし明よまりく　洪八独の槽ひよ
てうく一人も角さ方便品と法海
もる　女郎菅可願　人者と満足
也一切衆生皆令入仏道　角感
也経よ　法華経　立海浪の　武う私
ひ法やあ　ちまやきも角感
きるあ波よ法ひくなと給まぐら
ちくへまとまく　知計
清晨あ浪ひ波ひるとよ晨
しか宰相の房入鎧密也　と一人も
甲冑と等一芸具いくくみしはは
ぬ明人まとまく　見八生
思の森の合戦よとひくなと大下よ

あまき宮将守ほまれと新あれの三位
角感と　と語ん馬よ是と頭も
ちうあり　抑此一谷と申よ前ハ
海と険しきひとう狭ハ島あり
てかきうくく敵もあり　とうつへき
地ちうひ　鎧度も是手れ陣
と心許あきうかくしなとの一門
けつうさう角感も具随たうう
あうしく新陣よ海ハ小宰相の房よ
向ひ既軍明日よきはまりの痛
つやはの角感なて此うう頼
しきはあつはきうもかもちうは
ちよりう見ひはあう跡うしてたひ
絵へかう形情うれ盃角感酌とう

ぶりつうう貫ひまうう牡丹
ひうとへ唐の頂羽高祖の責
とう戦の農氏う深も見よんうて
増へき燈うつて月れそよう
向ひ詩う感ようう　合弟ハ絵登
寺や甲冑とうひつ角感ハ行く
ちうなと退ちうよう界ようう
具色の蒼つうや絵や寺ひう弟
とひちうは他人うは打ちつうや潮
よてうふて行ひれ無一芸の前
つもう感の山乃ばかうひうあ
去程よ合戦とま明うへ但馬守経
正もや討ぬとまと　拘薩ア寺
忠度の是いうよ　宮部乃六郎

忠次と名て討きりの天晴角藏
を名あるゆもの討死をと侍ふ
ぞいあきをみよう歌よ四方四往
人みく武村の源五室章の難をあき
てかきたる通藏とてもちく
うひめさまうけたる太刀あれ甲
乃まつかりちやうとうかへをたち
えてけちく去よ海道の者を
支配あれをたまこと百ちく吊ひ
てうひ給へ讀誦色をや附ふく
悪鬼ちうをやうを悪魔落悪の
姿みく美女陪も家よ来ぬ北成仁
公陪ぬ方と呼ゆくそう給きく

松垣

是を肥後芝國居戸と戸山み
居住れ僧みくへ扨も此岩戸の
觀世音ハ寄給ふ勝つほうあれ
ハ猶主籠一有の致景をみくよ
南西ハ海雲漫々として萬古心れ
中ありへまれうて慰ほく
致景ありく鄙里ほくまこよ
住へき霊地と思て三年ら間ハ居
住つるまりくハ家よ百ものも及
浪とほうき者女毎日ありて乃水
をほくまりぬとも知りてら
ぬ者ちと名と寄りやと思ふ
かを白ほの水くめへく月も技

屋めるひらん丈籠島ハ雲をひ
婦陪の朝と番ハ人間もよ見所
貧家よハ親をもくなく賜きよハ
故人ちく者樣へかくもなく
露命きいまつく霜塔よ仏たを
おくるく水れ気よの其ちとう祢
ゆくちるり家ハ何も白ほのく
水ひ〳〵写き其羅ちうひやちを
拾人よ値遇をもちうを事めひ下
菴ほちよ家よきり出ちいほよ家
みちう いつものちくきもよハ
ちあきて主りてハ 毎日者女
乃歩んをもも痛ちうちうハへ
せめくハかやうれるみて社歩乃

羅をもちくへくれあり猶拾を常
ひ給ハへ明おいまの事りハへ
眠ハいん猶く徒ネ乃ちとお
ちう給へ ありてちとのきとハや
中ちうり是ハ思ちもちうを伝
武徒撰集れ年よ年ハれて我
ちうりも白ほのちうを徒道者よ
きるかおく讀しを臺ちうなり昔
筑前れ太宰府よ居よ松垣ちう
ひく住し白拍子なよハ裏ちく此白
ほの邊ほよ住也 ちうちうりと
ゆ乃ちう其ちほれ居りれちう
と藤原の典範通りし時 水ちあ
おとてほをたまひ給ふ其水ほて

[illegible]

や形風緑野はたさまつてゐん
てうゐてし雲うとうよ雲まつく
月桂まとかも朝は紅顔あつく
路はたのしくゆ　ゆは白骨
とゐつく郊原はてうゐ　かる為乃
有様　を者　まと　ゆ生死
乃とうと論きりる　いを隠
あつひうや老少といつも命の
賢をうつく朝ときりなきうま
厭とゐをけうんゆ昼とゐ期物
けうん　かきやなきとぐはうつる
人ありゆあつくへ浴をあうゆ
へしげ跡とひて示きん　けうへ
浴を影りてゐ傳はとを麦べき

なりくはあうりゆひうとよ
中しよくは顔ひうゐ有まりやく
浴をうつ　優くうれうほ
もせへうれみあれとうを作白
けのうつうゆ巻の浴を和き
蒲つれけうゆ様やあゆも執心
れ水とうを猫白の浴んうゆうや
ゆやく保ひ絵　我古の業世のほ
まれ巻は脚は其罪ゆき故よう
ども苦をを三南けうは鐵れ桶を
巻ひ猛火れつくへとけきて汲水を
其水湯とゆつて我をゆくうう
陽をおきれ汲狂に傳れ値遇
よひうてづくへあきれ猛火はゆ

けうへ南異乃水とうんず其執心を
ゆ捨てどくくうひ給へし
いそくけうへれ傳乃ため浜かきを水
をはほを罪もやけうゆへきて
思ゆもうきけうへ衰乃技の露のむ
をひき　かき白け乃月巻技は
けうとも巻水を　いき沒を　つへ
乃水は湯れて技を月やけうん
けうむ星が鼎はれ実れ水とうん
ゆ技の炉はは南厳の業をたく
丈水はうけうゆて水けるもをく
青きう藤けうゆて蓋けう深し
本れけうきゆの軒ゆへ今れ苦を去
きをて　いや壇けうゆる思乃色

紅葉の展よりをこうひ、つゆ人乃
うを縄くりをこうき古も紅花の
ものあり花の秋の夕雲も一日
芸学とうやゆめ芸の桜葉花
ほまれもいとまりてはうつくき
紅顔の翡翠のつゝ花ほまき桂の
まゆも霜ゆりてゆゆうつる面影を
寒かき流してみうよれてゝ志髪八
玉水のもくつ廣芸かりまるゝ乃
ゆる桜う悲きるやうそよと思ひ
出れいあつゝや真白うれ辰かきて
安家の興花と其いゝ乃白拍子
と一ゝと有しゝ猶の花れ独今文
やもあさ辰ゝうき油をゝへぬ

そつゝき陸奥のぎれ細事胸あ
もゝ仔と白拍子其行もりきの有へき
ゝしく文ゝとも昔ゝ別し舞あまゝ八
ばゝても今ハ四ゝ乃ゝまゝと奥花
ゝきうよ宣八ゝ乃ゝまゝあされ油
露うも払ひ舞出ゝ 桜垣の女乃
ゝ芸果を 水もとゝゆづゝへ乃縄の
つゝへ乃縄のゝりゝ ゝ昔ゝ
ゝ白ゝ乃ゝあゝゝ行の浪白ゝの乃
水の辰をゝるゝへゝ是ゝまて見き
ゝゝれゝあゝゝゝ花ゝ音
とゝゝたゝゆゝうき芸の水ゝゝて
ひゝゝまいゝもゝゝんをゝへて
ゝひ給へゝ

男 か様ゝ者ハ東國方れ人商人ゝて
我久敷都よりひ、ゝ此度ハ筑紫日
向よりてゝ月日れ雲行ゝれ
きへゝを賣ゝりゝひ人ゝれひ此
文とゝ乃代ゝとを桜れ馬場の西ゝく
桜ゝれ毎と寄て慰ゝとゝけゝと伝ゝ
行ゝ人ゝ桜ゝ乃毎のかゝと意ひ此
ゝゝうゝて行ゝ者に仕ゝて業内を
ゝさゝゝゝ芸ゝ芸内ゝ桜ゝれ
毎乃歌ゝりゝか 花ゝゝゝ行ゝを
男 ゝりゝ桜ゝれ行ゝりれゝれゝ此代
ゝを慰ゝ毎ゝを伝ゝ行ゝ行ゝ是ゝ持
て寄ゝてゝがまひて慰ゝ毎ゝゝ

芸男ひゝゝゝゝゝを海ゝゝゝ
てゝ慰ゝく此毎月の陸有様ゝ
ゝゝゝれゝゝゝと商人ゝゝを
賣てゝつゝれゝゝゝ是ゝ今ゝ
ゝゝゝゝゝ

たよりなくなる故郷の今は行よう
明暮をだにて住へきおもひもよらぬ
行ふ雲山と迷ひまくゆく
（第）
比物語る桜川の山路のまよい
（男）
うく母　（女）母は常陸國つくの寺の
住僧なれば、母は濃りいたるまで人
をたのみ比丘尼の愚僧を頼母と由伝
注に御命の契約をなすべし洗
ものよ桜川どこの名前は今
と感の申ん弱ものだ物おもひ人を伴ひ
ぞ人の桜川へとあるいつてこの山こ
しかつもれば感じ雲の林の陰をも
きみ雲れ宮もうつるや松の巻色
も美めまて鶴を落る花の波桜川よ

（男）
も高よきりく　（女）いつかは行とて過て
去れる御ものもの　（女）御供の狂ものは
見ものや作花の今をさかりとみてい
（男）
中くれば花の今を感みて　（女）面
面白き事の女物狂のぶつつくさ
すひ鋼を抱く桜川よ流るまれを
きもひ人がきりくひ狂ひ
是よ増岸ひて洗物狂をたのもき人
（女）
みをれを手持ち人　（男）桜川へ
物狂と洗方へ　（男）やはり盛り
やあ物狂ものとくきもひ鋼を
持てこの人　（女）かはよあり
あ通行人桜川よ花の数の伴数

かつよ桜川とやぶりやぶりやぶりたよ
ぶりやと花まつ流れ花をや
流れ水のまくとめく
きぶんよも美ハ桜川ものをりとぶ時ハ
妙の花やもつく花やもつく重の
色桜さ桜花散りもの行よハ
（地）
水ものさやぶり　（男）男を海
花の雪　ちく海のぶやん　（女）是よ
出たるあ狂の故郷を築紫月向
ぶを思ひ　（男）ぶり乱り心
つくの海山ぶく箱崎ぶ浜立ぶく
を風南ハ筑紫の海ぶく常陸
あや色ぶを変め宮や親子の満な
をぶ桜ぶ桜ぶ桜ぶ家よまる

名に流れたる桜川ぶく面白き
名前ぶ桜ぶ桜ぶ
ぶ桜川よ　（女）ぶ桜ぶ
花島の立ぶ　（男）ぶ親とよ行
ものぶ親とよのぶ
よ　（女）ぶ
忘れをぶ　（男）ぶ
狂ぶ　（女）ぶ
ぶ　（男）ぶ
狂ぶ下ぶ有ぶ
と思ぶ是ぶ狂ぶ
是ハ　（女）ハ遠ハ築紫ぶ

者ありけり　うれハ行とくるまよ狂乱
と八成たるう　さんハ広さう方忘れ
かてこのみとうまに生て離くハ狂よ
思ひ乱まくハ　悲痛ハやハ丸
ゆとハうつくしきとハ綱とも流
るく花をひとひつまつ丸渇仏の乳色
みゆくハ行とゆたるすまくハそ
けんハ我拾郷ハ非をハの花さくや
昨とゆくハ非拾ハ桜求ゆて空入ぎき
ハ初ま　我ま　其所氏ま　あれハ桜
ま　ま　ま　

水の気とハ戸白波の花よりも
も今ハ花をも悔のやちひ百
鳥やまあわゆくあつ三ぞもれ花
猛ようやまわく霞を気三露と
おりめる心あり[illegible]ても名よの
やくくいろ思ひわすれ梅ふ
浪の花ちくくもかをまく
先くくうち浪の花ちくくもかをまく
そかつきの月やもどても桃花哭や
眺の陣外水の花あれ[illegible]もよまく
ふさ水を陽と落とれと鉄ちひて
をひとをとまるかて花ちよ人の水を
きとあく梅りよあまよ

乃が為よ思ふ行きて今ハ[illegible]
親ふれ撰ふ打もきの花梅[illegible]
弥ふよ梅ふ[illegible]八為ふ[illegible]
ちるひいつき[illegible]三年れ
月ねりとりてるもふ春さ親とよの
をの姿ハかれた[illegible]すうんあ行
行たくを[illegible]ふ春ハ[illegible]
花の良りせ[illegible]こハよりまを賞花
[illegible]ふ[illegible]鳴ちを嫌ふ春れ
かてとも[illegible]ひ立ハ[illegible]
たまけ梅ふ[illegible]仏暴し縁とふ
きふ二世安楽のえん深さ親ふ乃
通ふ[illegible]

善光寺と[illegible]たのゆ[illegible]仏乃御
寺尊今[illegible]昔ハ都方ふ住居ふ者
そひ[illegible]昔ふ蔵りハ事ハひやく海
山姥[illegible]ハ名と[illegible]謂ふ山姥の[illegible]
[illegible]と[illegible]曲業ふ作つくれ喝ひ
方ふ京童部ふ[illegible]
洗ハ善光寺ハ[illegible]有ふ由
猛ふ暴ふ信濃国善光寺
へと[illegible]都を出ふ[illegible]浦
船ふ[illegible]ふ[illegible]
露ふ[illegible]ふ[illegible]
の樹思ふ[illegible]

堀ちの〳〵あ〳〵いらの松乃夕煙ぎ〳〵ぬ
うきいろ乃罪ときる陸のつゝきゝとと
あ之山ぢ乃路うまうす三新路の國の末
屋とく〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ

秋もよ真の海を見へしぞとやかきろう夕月の　ゆかきたよ雲をたく深山へ乃ゝく雲よ月をかき清て此山ゝかゝ一ゝ　をすかゝ　ひ給て具附秋海棠もあらう夜れ神つきて　秋ア華ゞまつ　しとゞ　れい具まかさひようぶよきりく

ゆうしゆうのうきりよ　ゆうの海と行し　ほゝぬ雲ゆう詠を　たゝ　ゝ　ゝ　

ぞほつ、あくも呼子鳥の鳴すさび物と
なれば、ず丁ことゝて、山ばゝるゝよ幽あり法
性峯うひして、求菩提と題し、
明谷寒さ粧ひて、化生を表して、金
海隆よ万人、紀伊山姥ぞ前も志ゝ
富もあり、雲水と信ずるゝ
山の奥も、多く幽まゝ人間よあゝ
ちく、陽つゝ雲の身をうゝ、ゝりよ自性を
変化して、八会化生の寂を多して、目前よ
来れ法界色一如をみゝ、時に色即是空
そもゝゝよ、ゝあまゝ世法ゝ煩悩あれ
菩提ゝ、佛あまゝ衆生ゝ衆生あ
まゝ、ゝもゝ、樹なゝ、花ゝ紅井
のゝを、拘人間よ遊ゝ、ゝ時ゝ山賊の

拠路よ通よ、節陰山ばゝ、ゝ
ゝ月法ゝよ山と出家ゝ、ゝ
ゝよ、或時ゝ樹姫ゝ、ゝ
きゝ、ゝ校の、ゝ、ゝ紡績ゝ富
ゝ、ゝを貴人を助ゝ、ゝ、ゝ
目よ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
蟬の唐衣、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
月ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

百九人をまち氷室のいとなれども
寿のやと為作　氷室寺とも
未成山陰や花の宮ちも集し
深谷よりそる松陰やをのをのきを
ゆもとめんをつまし一花ひらきぬ
天下の皆去初きとも松ハ常盤
をつくる緑ようを氷室山の谷
ひいまく音りして氷よ弱く水多
ひあも静よ宮常て宮豊年をと
もる御代のび調の道もすく成へし
風ゆくかよ宮ゆやを年の山
迎かりき　ゆかりあやびむろの山
深みくりゆく素れ氣を谷ありく
此谷陰ハくるのまくれ入宮を

つつめをきゆ霜の翁の年とよ氷室
ハでつさ寿くありく　ゆるよ是
ある老人よ寿へき事乃作
でありれすみて行乃ら寿の
ハたと氷室寿みくるか　ハ人の
氷室もみてハ　初も寿をみ指
ゆのれ法ハだりをいなれ社有を
ムくりハ入りめ世掘いりの摘
ようゆ去夏迄氷の清ハら調毒く
ハ　著ハ猶乃廣野を一村の森
の下居をしゆ氷室月半ある
よ宮ハ御衣ハ放ようりてハか
りく冬野のハ年のこをしあや
しをいハ賢とれ一人の老翁

雪氷を屋内ようくりの俗翁ハ指
ゆ仙家よ巻雪紅宮とそ藥乃
ゆをあり翁もりくとそ氷を
供ようゆへしりう氷れあの供御
もまりて　謂をやを面白や
掘ひむろの社有くゆ代ようも
国をあまくりて有しよあり
ちハ仁徳天宮乃御宮よ大和国つを
乃氷室ようゆ人をあり氷乃
あり　まく墓ハ山陰乃宮も
ありれもりえつをだりの心を
松ヶ浦　山陰も氷室ありしを
又此国よ氷をりつして深谷もハ
きく谷風宮を氣も　傳りあり

そしとも素長人の氷れ法御
乃為毋国ようり乃郡よ氷室を
りあり　ようく翁ハ
山もあもも深ち陰の日影もりく
ぬ深谷あまそ去夏を雪氷乃
消あもよハりせ　いやあようて
氷の清めと取ろ宮君の廟をし
あされうり　ようつ物の宮氷ハ
ようよの国ようくりきハ寿ハ
ハよ清家あを　りきハ
つりのきこの　社ひりて結ひ氷乃
ゆりくをく春を行きよの風や
ようをくと讃られ　ゆ　まよあり
去よりよてほりハきゆりあり

まことや夏たちてのち氷室の
無月よりあらためて室の落氷
供はの力よりあらていりてのち
あらしく　天地人の三才
みも君をもつて主とし海萬物
出生地の恩德なり皇國
あらく帝道廣みはうんあり
仏日光りかくしてば輪
陽德なりとたゝへ
もつて雨露雪霜のめぐみ
夏の日よりあらまてきぬ氷
室ふるやまてやまてやまてやまてへ
あるまや萬物付て有なり君のめぐ
みをうけて都のおれふ山

ぼらくとまなまらてやまや夏山よりあり
ぬまいく氷室はまへて立ちる
下もちつかまのあるもちめる氷室
きり夏宴なれは神はかぐきき
ありきるり　ちえたくなりや氷の
あのくば調ふ道も真よあるあり
いまも歸る　皆く物をあるて
山路のはつかて秋ら雪れ氷の
は調ふあるまつはれをよ
きやひつきの命をはかるよう
やうを　人ふうきは此山の山
下水下の氷室を寺護しあり
無よりあるとづひもあ
ねを山をあるぐ室の松聲よ

たくはあるの貴ふあり山の草
まて　あるく氷をきて室
あると思へ氷室寺の落氷を
みをとみて山ろのうらよ入て
きりひむろのうらよ入て
庵樂ひろはてのうの葉れ神社
ぬくあるき　かるぬや氷室の山
ひろはてのうの葉の神
星あるさはの代のえりもあ風
びもろれは調ふあり　あ
ちやくはもいきなきびあり
これ砂　長してなをほのりを
よりも山はすも震動し天地も
うてきて室のきりよはとうち

て紅蓮大紅蓮の氷を敷く氷室の
下水はけらくかやきてう頭をたる
谷の氷屋はけしく氷りてゆく月
もかやく氷のたまりて萬境を
うつす鏡のごとく清光にすみを
吹くらんく陰もこうきの谷の
戸よ寒きしきあれいよ
きりて岩しまれ水をけきを石の
ゆく井の氷よとちまきらんとて
もかくうかびいでる氷室の
井もあらけなやびやうの屋
しき君のびつきあるやく
波とたさるるも氷のとまつる
も氷の見よそく月よりさて氷

俗ゝる氷のあれ海ゞうあく波へや
う苔へ給をと家女の舞のぎをと
めくらひ小忌衣の袂ほて蒼氷
をぎたらあくどりひあくと氷
室の井の氷をたてし日歌を
つそ氷をうきぶりを吹
て花の都へゆきをちまぎ雲をたつ
きて北山芝をやあもたた
ゝくいつをやいそけ氷のあを
ぎ苔つる有も景宮の邦ぢる
俗れも日の本の君よ俗調を
うつめてたまき

雲路をたつく樹をぐく出る日の
本と書き 異人大唐の天狗玄
首領善東房ゝくいはも我国よ
をひく育王山青龍寺慧若奉よ
をうきまてびき慢心乃書をバ貴我
道よ後引きをを文ト苔ゝ城や日
本の業敵地の小国ゝれたト国
ゝて仏法ゝをさひる由家乃間
遠き日本よ渡ト仏法をもを風た
きやとあいかゝ名ゝ苔ゝ豊芝
原の国津ト苔ゝく書ゝおをよ
ゝ苔ゝおろをを風ゝをほうを露お
まゝ我ゝ鳴根乃朝用ゝ苔ゝ

たゝく俗ゝ月の邦ゝ俗国ゝ書ゝ
よく 悪ゝ道よ先方や日本ゝ
地ゝををてゝ邪ゝ俗ゝ豪宮山
立都ゝ郎房よ書をトさゝやと
あゝぎゝや電宮山ゝをうきゝ山
乃波ゝゝてゝ見ゝ邦ゝ住ゝ
可ゝてゝへゝよ業ゝ山ゝ
俗ゝて 善ゝ大唐天狗ゝ領
善界房ゝてゝかゝゝよ魚ゝト筑
きゝよ細乃ゝて見ゝゝくゝま
ゝてゝ備ゝ愛ゝひゝる善界坊
ゝく慶ゝゝ先栗ゝ菴室ゝゝ入ゝ
ゝ我ゝを行の馬よ乗ゝく俗ゝ
ゝ俗ゝゝゝゝゝゝ人ゝ俗よゝ

神ぶつとうて首王山青龍寺般若
臺よりのぼるをぶつて慢心れ宮をハ皆
神道よりつくりまひらつて神ぶつ滅や
日本ハ小國なれど神國にて佛法
今ようやくおこる也邪風少心よ魚ノ
遠くを近とまうてこの國ハ心をもて
つくる自他の本意を達ぶべく
偖もやすくも男女食ハ人ハ火ぶ天神
國ハ天地風雨ノ洪方ぶ外國ノ
ぶれハ法ハ今ようやくおこりぶそくまをき
比叡山ハ日本ノ天台山ハ
心ノまくよ風ひ給へ 偖もよく便
あるぶ天台ノ仏法を指ぶ二教ノ
又密家の奥義をつく 顕密兼学

ひ行あるを 神くるをの顔ひて
ゆやもく風ひ給へ 給へん事 蟠蛭
等とうや猿猴か月よあひ
くをもれもちろ我慢増と慢
心の便をそんと思ふ人ぶ人の廟
力といよく夢ぶ人ノ
明王ノ誓約まくゆしく人ぶ其利
益よりひよこえぶ火ぶ三時よ
入行て一切ノ魔軍を焼きり
外ノ人ぶ慈悲ノ相をきんきくく
心慈悲ノ法恵凝ぶ不動ノ邪を願
ノ但主ノ人ぶ心おを中ぶ者神
悲願ノ人ぶ輪ノ
道とをやて魔境よりひ其欲ぶ

思ひをくもや神ノ人ぶ
国ノ人ぶ国ノ人ぶ
ようぶ三悪道をおくく尚て冠黄ノ
ぶをかりくくく仏敵法敵とおれる
ぶをまよ人ぶ此ぶを歌ひ
面りくをくもくもくつ新羅ノ智
ぶをえて人ぶ三時ノ煩を通きくつ
ようぶ等ハ夢をうくうくくも
ぶ花いをもく雲のくくく様ひをひく
ようく婦服をとハ思ひていよく
神慢の旗ノ人ぶをもやていくく
ようぶ者の家を倒ひく魔の利剣
を作くくくくくきき
ぶ人ノ人ノ人ノ

[illegible]

伽十二天[illegible]

[illegible]

是は唐土[illegible]

[illegible]

[illegible]

月はめぐりめぐれとうつる人の気
もて乃秋もましく　翁　趣も我
讀誦の色をたゝひ夢うつゝわ
ゆるよ人の月よみ行まつわる
人ゝまゝまれう　女房　見し八洗
ゆるうよもゝ者ゆるゆもあひ
かゝい御法をひゝをゝきをしゝ
結縁をまひくかりをゝどゝても法を
ゝてしまつゝもれば行とゝ入ゝ
かりれ言の葉ゝ乃信ゝのうゝを
窮乃まゝりとゝのゝ為ゝ結縁ゝ
者絵ゝゝ　翁　法乃結縁八
城よゆゝゝ事ゝれゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

お宮をまつゝひつゝ　女房　其ゝ名乃ハ去
事ゝれゝ前人ゝゝれ我ゝゝ
ゝみゝ宮ゝゝゝゝゝ　翁　おゝし
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]の芭蕉諸行無常とあるよまるく
樹を雲のうらのもをなのつゆ[illegible]
[illegible]ゆゑ紫ひあさ芭蕉の世と
[illegible]れをそそのきあれ
[illegible]きくうぐ思へいくうも
もとつ月もあるほの場所の芭蕉
やつ[illegible]
の雨やあぐ[illegible]ゆあるほの教よ
[illegible]
[illegible]芭蕉塚の御法の雨もゆ
なる露のめ[illegible]
[illegible]
[illegible]芭蕉塚のうま
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

乃羽衣あれや　見てをしもきぬ乃ぬ
ぬくとをるく　みひたしとも芭
蕉乃あつさの風ぞうくとも知とこき
ゝる寺乃庭素あさいち地ぞえなへし
くるやだるかきうつろ露のまよ山
ぢ　松乃うを吹くひく花もも
紅もちくよ花もちちを敬よ
あれ芭蕉やかまて踊りきり

百萬

竹馬よ　さや法師角　芝乃故
を尋ね　昼い和州三芳野の者
うくいよ是よ濃いれさあき人を南都
西大寺れあるゝまてほろひしてい此
比ハ浮世ハ大念仏をゝ行ふ此ゝ
人をつまゝ念仏よまゝいやとを
あゝわるゝ乃念仏の掛ものゝ
とをとをのゝ　南無二乃弥陀佛
南無二乃弥陀佛　南無二乃弥陀仏
南無阿弥陀仏　みゝ頼む　人を
あ風乃月あれや雲をまゝ西へ
ゆく行ゝ仏やかまゝたゝ　誰乃へ
頼まゝるゝたゝ乃ぬさゝ

云ゝ乃和ず　ゝゝし心か乃ぬ様乃ゝ
車よあゝくゝ風　つむゝも車
ゝ行ゝくゝゝもひきやえいけゝえいさと
いゝゝとよ東ゝゝゝ乃力頼めや新め南
無二乃弥陀仏　宮や宮ゝゝゝゝやて
ゝ道ゝよまゝゝゝゝ